

# 八幡原遺跡 物見塚古墳

飯田市立病院移転新築工事に伴う  
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市教育委員会

# 八幡原遺跡 物見塚古墳

飯田市立病院移転新築工事に伴う  
埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書

1992年3月

長野県飯田市教育委員会



物見塚古墳全景



埋葬施設検出状況



埋葬施設全体上面



埋葬施設全景



人骨・副葬品出土状態



頭蓋骨出土状態



劍出土狀態



短劍出土狀態



漆被膜出土狀態



剖竹形木棺内土層堆積状態



土壤及び粘土層断面

## 序

飯田市民を始め、下伊那全域の住民が待望久しかった、地域医療の中核飯田市立病院の移転新築が、松尾・鼎の通称八幡原に決まり着工しました。移転新築場所は、常盤台・長姫高校の1段上の台地であり、ほとんどが桑畠でした。

敷地は広大であり、多数の埋蔵文化財の存在が考えられましたが、試掘調査の結果は、物見塚古墳以外は、遺構等の確認ができず、古墳周辺部に限って発掘調査を実施しました。

物見塚古墳は、調査が進むと新事実が次々と明るみに出て、新聞紙上を賑し、皆様の記憶に新しいと思います。近年考古学ブームといわれるなか、見学会も2回行なわれ、多数の人々に地域の古代史の一端に触れていただくことができました。

当地域の古代史上、きわめて重要な位置づけのなされるであろう物見塚古墳は、現状で後世に伝えることが強く望まれることはいうまでもありません。しかし、新市立病院建設という地域全体の声、また、時の流れの中で消失してしまうこともやむをえない現実といえます。

本報告書は、消滅する物見塚古墳という貴重な文化遺産を後世に残す唯一の記録です。

この報告書にあります歴史の事実は、私達の遠い先祖の生活史であり、原点といって過言ではないと思います。

本書の上掲にあたり、社会の発展と文化財保護とが調整される中で、調和のとれた地域作りに一石を投ずることを期待するものです。

終わりに、調査実施にあたり様々ご協力をいただいた、関係者各位に心から感謝申し上げます。

平成4年3月

飯田市教育委員会

教育長 小林 赤之助

## 例　言

1. 本書は、飯田市立病院新築移転に伴う、飯田市郷・松尾地区にまたがる「八幡原遺跡・物見塚古墳」の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、飯田市立病院からの委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 遺跡名「八幡原遺跡」・「物見塚古墳」に、略号「YHH」・「KMN」を与え現地作業から、整理作業の図面・遺物等すべてこの略号を用いた。
4. 本調査は、多くの機関等の指導・協力によっているが、特に岩崎卓也筑波大学教授には、様々なご指導をいただいた。
5. 本書は、佐々木嘉和・小林正春が記述し、小林が加筆・訂正と総括をした。
6. 本書に掲載した図面類の整理・遺物実測は佐々木が行った。なお、整理作業実施にあたり、整理作業員が補佐した。
7. エレベーションの水平線に付した数字は、標高をmで表したものである。
8. 本書に掲載した石器実測図の表現として、使用痕及び擦痕を実線で、刃つぶし及び敲打痕を破線で表した。
9. 本書に掲載した古墳平面図は、写真実測によるもので、株式会社ジャスティックが撮影・図化を担当した。
10. 本書に関連する出土品及び諸記録は、飯田市教育委員会が管理し、飯田市上川路飯田市考古資料館に保管している。

# 目 次

序	
例　　言	
I 経　過	
1 調査に至るまで	1
2 試掘調査	1
3 発掘調査	2
4 調査組織	2
II 遺跡の環境	
1 自然環境	7
2 歴史環境	7
III 調査結果	
1 古墳の位置	11
2 調査前の状況	11
3 墓丘形状及び盛り土	12
4 周溝及び葺石	13
5 埋葬施設	15
1) 土壙	16
2) 割竹形木棺	18
3) 遺骸及び副葬品	19
6 墓頂部施設	20
1) 墓頂石列	20
2) 墓丘南側方形落込み	21
7 周溝内施設	23
1) 南西周溝底遺物集中出土地点	23
2) 馬齒出土地点	23
3) 土師器単独出土地点	23
4) 周溝内石敷	25
8 方形周溝墓	25
9 その他の調査	27
10 遺物	28
1) 物見塚古墳出土遺物	28

2) 墳頂部出土遺物	29
3) 周溝内出土遺物	30
①南西周溝底遺物集中出土地点	30
②馬齒出土地点	34
③土師器壺単独出土地点	34
④その他	35
4) 墳丘・周溝出土混入遺物	35
5) 方形周溝墓出土遺物	36
IV まとめ	37
おわりに	42

## 付図目次

付図 1 物見塚古墳全体図

付図 2 墳丘土層図

## 挿図目次

挿図 1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図	4
挿図 2 調査位置及び周辺地図	5
挿図 3 調査地点位置図	6
挿図 4 調査遺構全体図	10
挿図 5 磁石平面図	14
挿図 6 埋葬施設平面図及び断面図	17
挿図 7 埋葬施設土層図	18
挿図 8 埋葬施設遺物出土状態平面図	20
挿図 9 墳頂石列平面図	21
挿図10 墳頂部石列・南側方形落込み平面図	22
挿図11 周溝土層図	24
挿図12 周溝内石敷	25
挿図13 方形周溝墓平面図	26
挿図14 深掘区土層略図	27

## 図版目次

第1図 墓葬施設出土副葬品	45
第2図 墳頂・周溝出土須恵器・土師器	46
第3図 周溝出土土師器	47
第4図 周溝出土土師器	48
第5図 周溝出土土師器	49
第6図 周溝出土土師器・馬の歯・巻	50
第7図 周溝等出土鉄器・鐵滓・混入石器	51
第8図 周溝等出土混入石器	52
第9図 周溝等出土混入石器	53
第10図 周溝等出土石器・混入石器	54
第11図 周溝等出土混入石器・鉄器	55
第12図 方形周溝墓・西深掘区出土須恵器・土師器・石器・金属器	56

## 写真図版目次

図版1 物見塚古墳調査前・調査後全体
図版2 全体・埋葬施設検出
図版3 埋葬施設
図版4 埋葬施設・墳頂石列
図版5 墳頂南側落込み・周溝土層・蓋石
図版6 埋葬施設出土副葬品
図版7 埋葬施設出土副葬品・周溝出土須恵器
図版8 周溝出土遺物
図版9 方形周溝墓
図版10 方形周溝墓
図版11 深掘区
図版12 物見塚古墳出土遺物
図版13 物見塚古墳出土遺物
図版14 物見塚古墳出土遺物
図版15 物見塚古墳出土遺物

図版16 物見塚古墳出土遺物

図版17 方形周溝墓・深掘区・混入石器

図版18 調査スナップ

図版19 調査スナップ

図版20 調査スナップ

図版21 見学スナップ

# I 経過

## 1. 調査に至るまで

飯田市街地の北東、市街地の一画にある現飯田市立病院は老朽化が各所にみられ、現代の新しい医療技術導入には施設面で対応が困難となった。また、近年の車社会の中で敷地面積の制約から来院者等の駐車場確保がきわめて困難であり、地域の中核病院としての住民要望に充分答えられない状況になりつつあり、ここ数年来、その改革等について市内外において盛んに検討されてきたところである。

諸条件下において一定の面積が確保されかつ交通の便等も考慮に入れ、現地改築、市内のいずれかに新築移転について様々に研究がなされてきた。そうした中で鼎、松尾地区にまたがる八幡原地籍がその移転新築地として、諸条件が合致し最終的に用地として決定された。

それに基づき、昭和62年10月12日には、新病院建設に関する飯田市内部の関係各課による調整会議を行ない、埋蔵文化財包蔵地の取扱いについては、対象面積が広大であるため、用地の取得状況に合わせて試掘調査を行ない、その結果により具体的な方策を決定することになった。

その後、昭和63年10月25日には、長野県教育委員会文化課担当職員等による現地での協議を行ない、前述のとおり試掘調査後に本調査する旨、文化財保護行政の立場での判断を下した。

それに基づき、昭和63年12月より試掘調査実施が決定された。

## 2. 試掘調査

関係機関等の諸協議を受けて、昭和63年12月に、飯田市長より、文化庁長官宛に、文化財保護法第57条の3第1項の規定に関する土木工事に関する通知が提出された。引き続き、飯田市教育委員会より、文化財保護法第98条の2第項の規定により埋蔵文化財発掘調査の通知を提出した。

それらにより、平成元年1月17日から、病院用地内に、幅1mの試掘坑を約20ヶ所、延長600m余にわたって設定した。調査は、ミニバックホーにより、試掘トレント掘削後、人力による作業により、遺構、遺物の確認を行なった。

その結果、物見塚古墳の周溝が確認された以外には、試掘坑内に遺構、遺物の確認はできなかつた。試掘坑の調査で、表土から基盤のローム層までの深さは調査箇所によってかなりの差があることが確認された。北東側の段丘端部では表土が30cm以下であるが、南西側は一段高い段丘の崖下であり、基盤のローム層上に堆積する漆黒色土が1.5mを越える所もあった。

### 3. 発掘調査

試掘調査の結果を受け、関係者による協議を再度行なった結果、物見塚古墳の調査を主体とし、合わせてローム層中の旧石器時代の遺物等について再確認調査を行なうことになった。

まず、物見塚古墳の精密測量を行ない、平成元年9月8日に重機を導入し、表土剥ぎを行なった。9月18日より作業員による発掘調査を開始し、特殊な埋葬形態の径30m余の円墳であることを確認した。また隣接して、1基の方形周溝墓を確認し、当地方における古墳時代研究に一石を投げかけて、なお、その間に2回の現地見学会を催し、市民多数の参加を得た。すべての作業を終了したのは同年12月19日である。

引き続いて飯田市考古資料館において、現地で記録した図面、写真の整理及び出土遺物の水洗注記、復元作業の後、遺物の実測、写真撮影の諸整理作業を行ない、本報告書を作成した。

### 4. 調査組織

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 福島 稔（～平成3年12月）  
" " 小林恭之助（平成3年12月～）

調査担当者 小林正春

調査員 佐々木嘉和 佐合英治 吉川豊 馬場保之 功力司（平成元年度）、渋谷恵美子（平成2・3年度）

作業員 市瀬長年 伊藤和恵 今村春一 内山トメ 木下博 木下当一 北村重実  
猪田多久三 坂下やすあ 高木義治 高橋収二郎 田中夏子 豊橋宇一 中平隆雄 平沢今朝光 平沢良子 藤本幸吉 細田七郎 松下直市 松島卓夫  
森 章 矢沢博志 吉川正実

整理作業員 池田幸子 井原恵子 大藏祥子 金井照子 金子裕子 唐沢古千代 唐沢さかえ 川上みはる 木下早苗 木下玲子 柳原勝子 小池千津子 小平不二子 小林千枝 渋谷千恵子 田中恵子 简井千恵子 丹羽由美 萩原弘枝 原沢あゆみ 林勢紀子 橋本宣子 平栗陽子 福沢育子 福沢幸子 牧内喜久子 牧内とし子 牧内八代 松本恭子 三浦厚子 南井規子 宮内真理子 森 信子 藤森美智子 吉川悦子 吉川紀美子 吉沢まつ美 若林志満子

事務局

飯田市教育委員会社会教育課

竹村隆彦（社会教育課長）（～平成2年度）

安野 節（ ）（平成3年度）

中井洋一（ “ 文化係長）

小林正春（　　〃　文化係）  
吉川 豊（　　〃　　）  
馬場保之（　　〃　　）  
功力 司（　　〃　　）（平成元年度）  
土屋敏美（　　〃　　）（平成元年度）  
篠田 恵（　　〃　　）（平成2・3年度）  
渋谷恵美子（　　〃　　）（平成3年度）

調査指導

長野県教育委員会文化課  
(財)長野県埋蔵文化財センター  
大沢和夫  
岩崎卓也  
桐原 健  
宮板光昭  
大塚初重  
小林三郎



- 1. 物見塚古墳
- A. 猿小塚遺跡
- B. 矢高原・八幡原遺跡
- C. 八幡原遺跡
- D. 南ノ原遺跡
- E. 田井座遺跡
- F. 柳添遺跡
- G. 天伯A遺跡
- H. 寺所遺跡
- I. 山岸遺跡
- J. 清水遺跡
- K. 城遺跡
- L. 黒河内遺跡
- M. 六反畠遺跡

挿図1 調査遺跡及び周辺遺跡位置図

図2 調査位置及び周辺地図



図3 調査地点位置図



## II 遺跡の環境

### 1. 自然環境

八幡原遺跡は、飯田市松尾、鼎両地区に所在する。松尾・鼎地区は細長い二等辺三角形の様な平面形をしており、北東は飯田松川をはさんで下伊那郡上郷町と旧市、東南は天竜川をはさんで下伊那郡喬木村と下久堅地区、南西は竜江、伊賀良地区にそれぞれ接している。松尾、鼎地区は飯田市のほぼ中央に位置し、天竜川の氾濫原を最下面に、5～6段を数えて最高位の名古熊面となり、比高差は120m余を測る。

八幡原遺跡は長野県飯田市鼎、松尾両地区の境界中心に広がる遺跡であり、両地区の最上位の2面にわたる段丘上に立地する広い遺跡である。下段は工場と畠園を除いて、ほぼ全面が飯田市立病院の用地で通称八幡原と呼ばれている。段丘は物見塚古墳の西の300mを頂点にした三角形を成し、底辺にあたる東南の段丘崖上部端で150mを測り、西から東南端までは約600mと細長い三角形で、標高は476m前後である。北東側は比高差16mの下位段丘面で北ノ原地籍と呼ばれ、猿小場遺跡（注1）である。南西側は比高差14mで高段丘に接し、それは広大な段丘面で八幡原である。上段段丘の病院用地は北側の崖側の一部である。東南側は比高差40mの段丘崖で、その下位には松尾の中心部八幡町が広がっている。

遺跡の微地形をみると、ほぼ平坦な段丘面であるが西から東南へ3m前後傾斜し、南西の崖下側が少し低くなっている。

物見塚古墳は、八幡原遺跡の下段段丘上にある。下段段丘上の北端部の中央よりやや西側に寄った下位段丘を望む崖端に築造されている。

地層を概観すると耕作土を含む黒色土層が段丘全面を覆い、それは場所によってかなりの厚薄差がある。上位段丘崖下が厚く1m前後、北東の端部は20cm前後と薄くなる。黒色土の下は若干の漸移層をはさみローム層となり、物見塚古墳をはさむ2ヶ所で2～1.5m掘削したがローム層下の礫層（伊那層）までは至らなかった。段丘崖での観察によれば、物見塚古墳付近での伊那層までの深度は約3mである。ローム層も深さによって硬さ、色調、混入石粒等に差がある。（挿図14深掘区土層略図参照）

### 2. 歴史環境

八幡原遺跡は鼎・松尾の2地区にわたっているので、遺跡周辺の主要遺跡を主体に歴史を概観してみる。両地区ともに遺跡及び古墳、城跡の分布が多い。近隣部において、発掘調査がなされ

たものをあげると、飯田長姫高校移転新築に伴う猿小場遺跡（注1）、公園新設に伴う矢高原遺跡、雲間新設に伴う八幡原遺跡（注2）、国道153号バイパス新設に伴う八幡原遺跡（注3）、工場新築に伴う南ノ原遺跡（注4）等の調査がある。これから調査結果と、両地区の主な遺跡を時代順に概略を記すと以下のような。

旧石器時代に比定される遺構はないが遺物としては、猿小場遺跡から、黒曜石製のナイフ形石器2点、八幡原遺跡（注3）から彫器1点などが出土している。縄文時代草創期の資料として、八幡原遺跡においてマイクロブレイド1点が表面採集され、松尾上溝天神塚古墳墳丘盛土より有舌尖頭器1点が出土している。縄文時代早期資料として、鼎六反畠、山岸遺跡などより押型文土器片が少量ではあるが発見されている。

縄文時代前期では八幡原遺跡（注3）・田井座遺跡（注5）において堅穴住居址が確認され、それらに伴う土器、石器が出土している。

中期では柳添遺跡（注6）・天伯A遺跡（注7）等各所で集落址の一部が調査され良好な資料を得ている。

後期、晩期では鼎山岸遺跡、六反畠遺跡などから一定量の遺物が出土している。

弥生時代では調査例が多くなり、特に松尾寺所遺跡（注8）では中期初頭から中葉の良好な資料を得ており、寺所式土器の名が与えられている。後期は山岸遺跡（注9）・猿小場遺跡（注1）・清水遺跡（注10）・城遺跡（注11）等で調査され住居址をはじるとする集落址の一画が確認されている。

古墳時代では、山岸遺跡・天伯B遺跡・柳添遺跡・黒河内遺跡（注12）・六反畠遺跡（注13）・清水遺跡・城遺跡等において各種遺構が調査された。古墳は松尾地区に特に多く、前方後円墳8基、円墳60余基を数える。鼎地区では円墳14基（注14）の記録があり、物見塚古墳も含まれる。物見塚古墳の周囲では、東400mの一段低い段丘端に御射山蜀子塚古墳、茶柄山古墳群、南東400mに八幡山古墳、北600mに鞍骨古墳、北西700mに大塚古墳があり、東南の段丘端にある妙見山古墳（注3）は平成2年度に調査され、方墳と確認された。また、妙見山古墳を含む八幡原遺跡東端の段丘崖上には、24基の方形周溝墓等の群集する姿が確認されている。

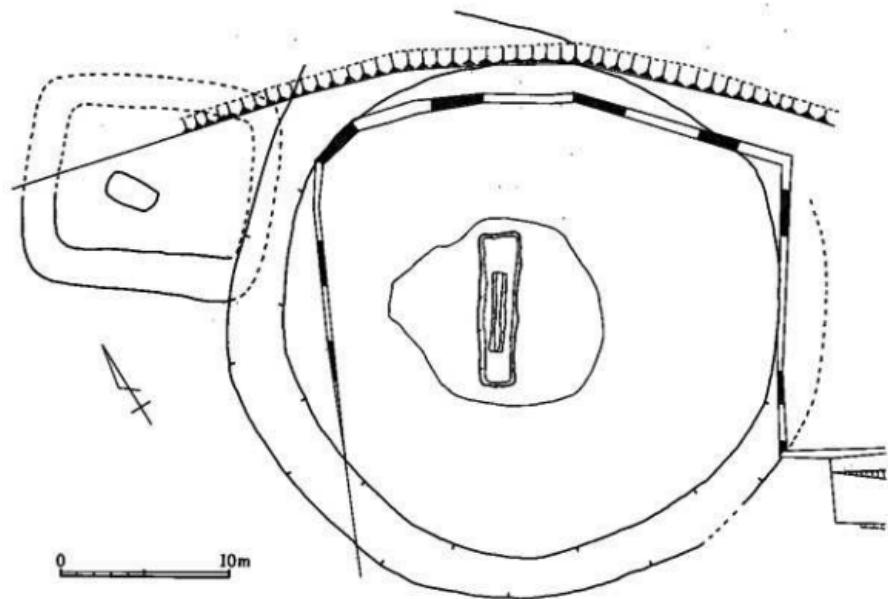
奈良、平安時代では猿小場遺跡・清水遺跡（注10）で集落址の一画が確認され、毛賀御射山遺跡では瓦塔片と布目瓦多数が発掘されて、古代寺院の存在が指摘されている。

中世に入ると松尾地区の南端に、信濃守護職小笠原氏の居城であった松尾城跡がありそれに関連する南ノ原遺跡（注4）で、居館址と見られる屋敷跡・掘・柵跡が調査され、完形の茶臼・緑釉天目茶碗等が出土している。

以上発掘調査で確認された概略の歴史であるが、中世からは諸記録等残っている。鳩ヶ嶺八幡宮の御神体は重要文化財に指定されており、鎌倉時代建仁3年（1203）の銘文がある。

鼎地区は古く伊賀良庄の記録中に山村として見え、松尾、鼎地区共に北条江馬氏、小笠原氏の繁栄を支えた地といえる。

- 注 1. 飯田市教育委員会 1980 『猿小場遺跡』  
2. 鼎町教育委員会 1983 『矢高原・八幡原遺跡』  
3. 飯田市教育委員会 1992 報告書刊行予定  
4. 飯田市教育委員会 1972・1974 『南ノ原遺跡』  
5. 飯田市教育委員会 1988 『田井座遺跡』  
6. 飯田市教育委員会 1992 報告書刊行予定  
7. 鼎町教育委員会 1975 『下伊那郡鼎町天伯A遺跡』  
8. 佐藤魁信 1982 「寺所遺跡と寺所式土器」『中部高地の考古学Ⅱ』  
9. 中央道遺跡調査会 1971 『中央道調査報告－飯田地区』  
10. 飯田市教育委員会 1991 『清水遺跡』  
11. 飯田市教育委員会 1991 『城遺跡』  
12. 鼎町教育委員会 1984 『黒河内遺跡』  
13. 飯田市教育委員会 1989 『六反畠遺跡』  
14. 市村成人 1955 『下伊那史』第2巻下伊那史編纂委員会



挿図4 調査造構全体図

### III 調査結果

病院用地内各所にトレンチを入れ試掘調査を行なったが、物見塚古墳の周溝以外の遺構は確認されず、物見塚古墳の周囲に調査区を設定し調査を行ない、古墳の北に方形周溝墓を1基確認し調査を行なった。

#### 1. 古墳の位置

本墳の築造された位置については、自然環境の項でも一部触れたとおり、天竜川の支流である飯田松川に面した段丘の北縁の中央部付近にあるといえる。段丘面は、ほぼ水平に近いが、下位段丘面側すなわち飯田松川側にあたる北側と、松川の流下する天竜川側（東側）に向けて、いずれもわずかに傾斜する。その段丘崖頭に築造された本墳は、下位段丘面からは見上げる位置にある。

#### 2. 調査前の状況

調査前における本墳は、ほぼ全体が畠地として活用されていたわけであるが、市立病院用地となつた以降は、何の作付けもなされず放置され、東端部にあたる法務省の墓地以外については、雑草が背丈以上に繁茂し、その地を知っている者でも丁寧に観察しないと見落してしまうほどであった。

調査着手にあたり、全体の除草作業を行ない、その現形を把握した。それによると、径30m余の範囲が緩やかに盛り上がる饅頭形を呈し、西及び南側の段丘上からは約2mの高まりが認められた。一方、段丘崖側となる北側部分では、段丘崖斜面の墳丘裾と判断される付近に、高さ約1mの石垣があり、その下部には農道があり、この道路面からの高さは4m程を測る。また、東方は先述の法務省墓地であり、その面からは3m程の墳丘高を見ることができた。

墳丘の形状は、当地方に残存するいくつかの古墳に比べ、墳丘面の傾斜がかなり緩やかであり、本来の形態からかなり改変されている可能性が強いと判断された。

以上を総合的に判断すると、直径20m前後の円墳であり、埋葬施設等も大半が破壊されてしまつた後期の古墳であると推定した。

### 3. 墳丘形状及び盛り土（付図1・2）

調査前の状況では、かなり削平された円墳であり、本来の姿は留めていないと大方の予想がなされたわけであるが、周溝の調査・墳丘盛り土の断面調査が進行するにつれ、当初の予想を大きく覆し、かなり旧状を保つ古墳であることが判明した。

墳丘上は、全体が畑地として利用されていたため、各所に耕作による擾乱はみられたが、大半は地表から30cm前後の耕作土下に、本来の盛り土が安定した状態で残存することが観察された。

墳丘全面の耕作土を除去した後の墳丘状態は、周溝内側最下部に積み上げられた葺石から連続する緩傾斜面を成し、後述する埋葬施設との関連からも、築造時に近い姿で残存した可能性が強いと判断された。また、確認した葺石及び墳丘の状態から、葺石の最上段付近に一段の平坦面を有した可能性もあるが、断定はできない。

墳丘外観は、見る位置によって若干の差がある。段丘上にあたる東・南・西側部分では、周溝をはさんで墳丘を見る形となるわけであるが、段丘の傾斜のため、南・西側部分では墳丘を水平視あるいは見おろすこととなり、段丘傾斜の下位側にあたる東側では見上げることとなる。

また、段丘崖側にあたる北側については、周溝そのものも確認されておらず、墳丘直下からかなりの仰角で見上げることとなる。さらに、北方の下位段丘からは古墳自体がかなりしっかりした姿で望むことができたといえる。

次に、墳丘を構成する土層について記すと以下のようである。（付図1・2参照）

本墳自体が段丘端部を周溝によりカットし墳丘基底としているため、安定した地山と人為的な盛り土により構成される。

周溝底から残存する墳丘頂部までの高さは、西及南面で2.4m前後、東面で2.9~3.4mを測り、そのうち、周溝底よりそれぞれ1.7m・2.2~2.4mの位置に厚さ10cm程の黒色土層が確認された。この層は、墳丘面の同一レベルにおいて鉢巻状にみられ、墳丘の土層断面の観察によれば、地形表面を覆った安定した土層であり、その下層は自然堆積によるローム層に連続することが確認された。結局、この黒色土の上面が、本古墳築造時における生活面と判断された。ちなみに、現状の墳丘頂部から、黒色土上面までの盛り土の厚さは約70cmであり、墳丘の大半が本来の地形を活用していることとなる。

黒色土上面が当時の生活面を示すことから、今次調査による周溝外側の検出面は、当時の生活面よりも1m前後低いといえる。これは、古墳時代以降における段丘上の土砂流失による可能性が大きいが、墳丘構築にあたり、周溝の掘削土のみで盛り土がなされたのではなく、周溝外の部分からも盛り土の供給のあったことも考慮すべきともいえる。

旧地表面から墳丘顶部にかけての盛り土は、土層観察用の断面観察によれば、大別して5層の帶状となる。それぞれが安定した土層として捉えられ、墳丘構築にあたって、単に土を載せたのみでなく、一定量を盛った後には踏み締めもしくは三和土的な作業の行なわれたことが推測される。

しかし、水平的には、何らかの規格性もしくは計画性があってなされたか否かの判断はできなかった。

以上の調査結果を総合すると、本墳の規模は、周溝底による内径30mの円墳で、円溝底からの墳丘高は、東面3m・西面2.4m・南面2.4m・北面4m以上であり、墳頂部における若干の削平行為があったとしても、この数値に1mを越えない程度のものと推測される。

なお、墳丘の残存状態が比較的良好であったことは先記したが、耕作等による擾乱は各所にみられた。北側段丘崖部における石垣による墳丘端部の削り取りは先記したが、それ以外で顕著なものとしては、西側部において墳丘崩落土に覆われながら南北方向の小路が墳丘裾にあり、それに沿って石垣及び溝址が構築され、南西側の葺石部分にも幅50cm深さ1m程の畠境とみられる溝状跡が検出された。さらに、墳丘東斜面には、戦後食糧難時代のサツマイモ貯蔵室が作られており、以上のいずれもが耕作時による深掘りと合わせ本墳の一部を破壊しているといえる。

また、墳頂部にはかつて本墳所在の目印となっていた松の老大木があったと伝えられているがその株及び根の痕跡が空洞となって認められ、その一部は墳丘のみでなく埋葬施設の一部にまで影響を及ぼしていた。

さらにまた、古墳破壊そのものとみられる痕跡が東南墳丘斜面に認められた。それは、地面での把握は困難であったが、先記のイモ貯蔵室下方に7×3mの範囲で大きく土層の乱れる部分があり、他の墳丘面の状況と異なり、葺石様の礎が多出し、本墳に伴う何らかの施設とも考えられたが、順次掘り下げた結果、近世磁器片が最深部より出土し、乱雑な土層状況を確認し、その掘り方も不規則であり、また、その位置そのものが、通例当地方後期古墳における横穴式石室の構築される位置に共通しており、近世における古墳盗掘の痕跡と判断した。なお、本墳の埋葬施設は、後述するとおり特殊なものであり、この盗掘者は結果とし本来の目的を果たすことができなかつたといえる。

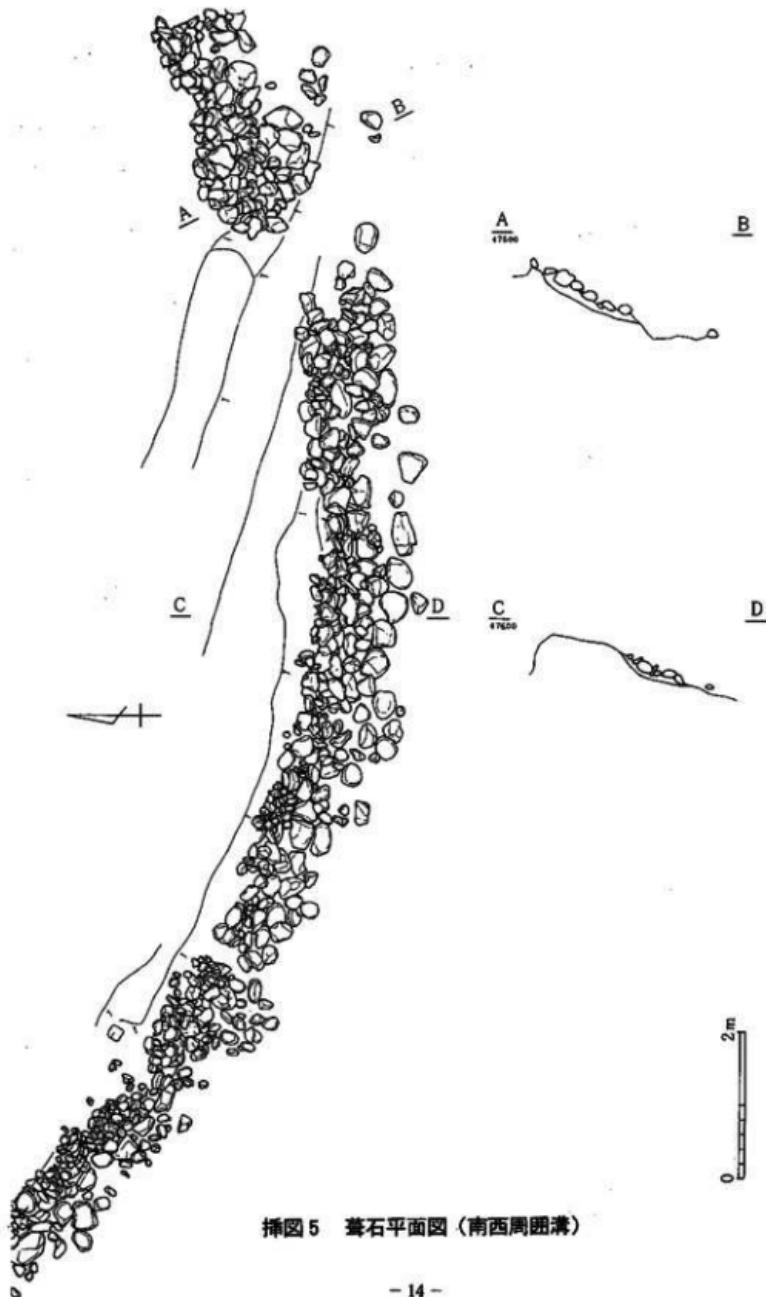
#### 4. 周溝及び墓石（付図1・挿図5）

周溝は、段丘端部の北東側を除き墳丘を回っている。周溝は方形周溝基の周溝を切っており、現代の溝に切られている。東南側は、法務省の墓地であり、周溝の外側までは調査できなかった。

周溝の幅は、計測位置により若干の差はあるが、外側の掘り込み面と同じレベルで捉えた場合残存状態の良い南西側で4～3.5m、外壁高は1～0.6mを測り、外壁は急傾斜、底部分はほぼ平坦で、内側の墳丘斜面に連続する。内側部分は、周溝底部より葺石がなされ、外側の掘り込みよりは、かなりの緩傾斜安定勾配で墳丘斜面に至っている。

覆土は大きく3層に分かれ、上層は黒褐色土主体、中層は漆黒色土、下層は褐色土～茶褐色土主体でありレンズ状の堆積であった。

周溝が終息する段丘端部の底部は水流で抉られており、段丘端部に周溝は無く、墳丘を造りだ



插図5 蓋石平面図(南西周囲溝)

したのみで開放されていた可能性が強い。

墳丘裾の葺石の残存部は周溝底から人の背丈程度まである。周溝の内側に葺石を検出したのは北東側を除くすべてであるが、擾乱等により本来の形を留めない部分もある。北東側は段丘崖になっており検出した石は、元葺石と思われるが、農道の石垣であり、図示したものは石垣の根石と農道下から検出したものである。良好な残存状態の部分において周溝底についた葺石の根石は径50cmを越えるものもあり他の石より大きく、平面的に使っている。南東側の残りの良い部分は、根石から実測図の最上部まで墳丘築造時のものであり、裾に大石を横に配し、上部は人頭大前後の礎を同じく横積みし、きれいな石積みとなる。西から北は墳丘下部を新しい溝に切られており、根石の確認ができる所は少なく、転落した石がほとんどであった。石は花崗岩の河原石がほとんどであり、北側段丘崖下にある飯田松川が供給地と判断される。

本来の葺石の状況については、墳丘全面を覆っていた可能性もあるが、墳丘の全面が畠として土地利用されていたためにすべて抜き取られたとも考えられ、本来の姿を把握することは不可能である。しかし、仮に本墳の全面にわたって葺石がなされていたとすれば、相当量の石が本墳周辺に存在するはずであるが、調査前の本墳周囲においては、部分的な石垣用材と畠の境石が確認された程度であった。それから、人々本墳の葺石は、今次調査で良好な状態で確認された墳丘基部のみに限って施されていた可能性が高い。

遺物出土は覆土中下層で、漆黒色土中が最も多く、転落石の下からも出土した。これから判断して、葺石近辺より出土した遺物は、本墳築造時期と合致するものと考えられる。

遺物は周溝の北東部以外の調査範囲全体から出土したが、何ヶ所かの集中箇所がある。特に南西部の一画より大半の遺物出土があり、須恵器・土師器の個体数は100点を越える。それ以外の部分は、土師器・甕・完形品の単独出土や、馬具・馬の歯・石器が出土しているが、それらについては、築造時とは若干の時期差を検討すべきともいえる。

## 5. 埋葬施設（付図1挿図6・7・8）

本墳については、先にも触れたとおり、調査前の予想では、後期の横穴式石室を埋葬施設とするし、東及び南側の墳丘斜面においてその存在把握に務めた。しかし、結果は墳丘斜面のいずれにおいてもその確認はできなかった。

一方、段丘端部に築造されている立地条件などから、比較的古い古墳であることの一考の余地があり、墳丘斜面の検出とともに、墳頂部に本墳の中心となる施設の有無を把握すべく慎重に作業進行を図った。その結果、墳頂部分は耕作のためかなりの擾乱を受けているが、人頭大の礎を直線的に配した状況が確認され、炭粒も散在し、竪穴式石室系の埋葬施設の存在を推測した。

調査は、一応墳頂部石列等を本墳の埋葬施設の痕跡と判断し、墳丘盛土の状態を観察するため東西南北に直交してトレンチを設定し、墳丘を十文字に立ち割ったところ、墳頂部のほぼ全面に

本墳築造当時の地表を示す黒色土が、墳丘盛土下に広がっていることが判明した。また、墳丘中央部付近において、黒色土が途切れ、ロームの存在することが確認された。ロームの状態は、本来の地形を成しているものではなく、明らかに人為的に動かされたものであり、また、その上部は完全に墳丘盛土で覆われており、本墳に関連する施設と判断された。

旧地表面に掘り込まれたロームの混入する施設が改めて本墳の埋葬施設そのものと推測され、墳頂部分の盛土を旧地表面まで除去した結果、黒色土中に黄色のロームが幅2m、長さ8m程の長方形に検出された。

### 1) 土壌(粘土層)

旧地表面に検出された埋葬施設の外形である土壌は、上部の検出面で幅2m、長さ8.2mの長方形を呈する。土壌下面は、壁面が傾斜して掘り込まれているために、上面より小さくなり、幅1~1.5m、長さ7.6mを測り、概略の断面形は、下方の狭い逆台形となる。土壌の深さは、棺の置かれた中央部において、1.0mを測り、方位はN35°E(磁北)である。

土壌中央部に割竹形木棺が置かれた痕跡が認められ、その位置の土壌底面は、中央部がわずかに凹み、浅い皿状の横断面を成し、全体としては樋状といえ、土壌掘削の段階から棺の安定を配慮しているといえる。

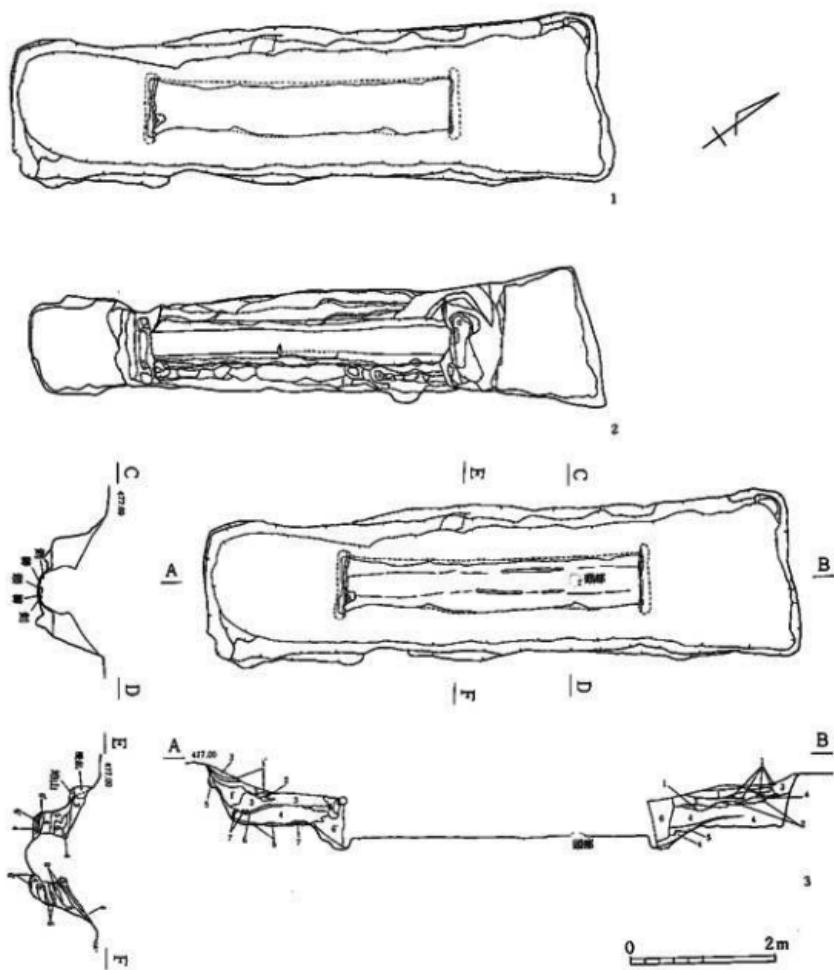
棺位置の両側は、ほぼ平坦な面が30cm程あり、壁に至る。

土壌内は、棺埋納後、土壌掘削により生じたロームを埋め戻し、棺を覆ったものといえる。棺を覆ったロームのうち、小口外側部分の埋土は、検出面から底部まで同様の状態であり、一気に埋められたものと推測される。一方、棺側面にあたる埋土は、土壌壁側から中央部に向け傾斜して互層となり、何面かの硬い面を確認することもでき、版築状に埋め戻しを行ない、棺を安定させたものと判断できる。

土壌内のローム上面は、上層の盛土と同様に浅いV字状となり、これを土壌上面として調査実施したが、本来は土壌上面と水平程度までは埋め戻し、棺を覆っていたが、上層の盛土と同様に棺腐朽に伴う崩落時に棺内に崩れ落ち、結果としてローム上面が傾斜したと判断される。また、棺内に埋めた土のうち、中間付近の厚さ約20cmは、棺周囲を埋めたロームと同様の状態であり、一部はブロック状に固まったものもあり、前記内容を肯定する材料といえる。

埋め戻されたまま残存するロームと崩落した土との境を追跡することにより、棺の形態を把握することが可能となったわけであるが、このロームが他地域にみられる粘土層の粘土の役割を果したものであり、形態とすれば、素材はロームではあるが、粘土層の呼称が許容されるといえる。また、埋め戻された土は、ロームのみであり、旧地表に存在した黒色土は皆無であり、このことからも、ロームを粘土の代用として強く意識していたと考えられる。

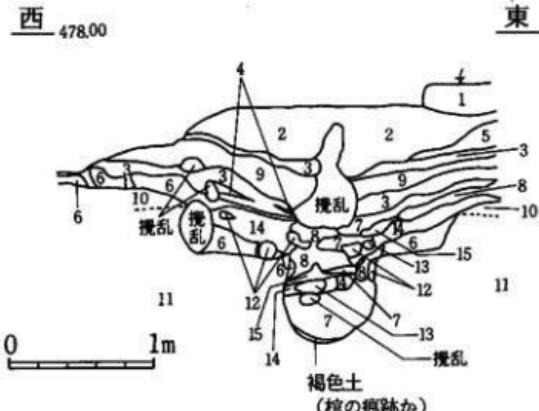
なお、棺底の一部と、両端小口部分には、灰白色の粘土が少量ではあるが検出されており、粘



1. 黄色ブロック混り 漆黒土    1'. 1より漆黒土が少ない  
 2. 黒色土    3. 黄色ブロック混り 黄褐色土    4. 黄褐色土  
 5. 黑褐色土    6. 黄色土混り 黑褐色土    6'. やや黄色が多い  
 7. 漆黒土ブロック

挿図6 埋葬施設平面図及び断面図 1 2 3

土そのものに対する意識、さらには粘土櫛に関する認識の存在もうかがうことができる。



1. 耕土-褐色土
2. 黄褐色土
3. 黒褐色土
4. 3の間層で褐黄色土
5. 暗褐色土
6. 褐黄色土
7. 黄色土に近い
8. 褐色土に近い
9. 茶褐色土
10. 漆黒色土
11. 黄色土(ローム)
12. 黄色のブロック
13. 茶褐色土
14. 黑褐色土(3より漆黒土の混りが多く黒い)
15. 14より漆黒土のブロックが大きい

插図7 埋葬施設土層図(東西方向)

## 2) 割竹形木棺

便宜上、表記の名称を用いてはいるが、棺材そのものが存在したわけではなく、正しくは割竹形本棺痕跡とすべきともいえる。

棺の形状把握については、先述のとおりロームによる粘土櫛の状況から判断したものである。棺を覆うロームの横断面形は、上部が崩落のため欠失していたが、直径約60cm円形状となり、いわゆる割竹形木棺の外径を示していると判断された。

棺の規模は、長さ4m、径は南端部60cm・中央部65cm・北端部70cmの計測値を得たが、棺本来

の姿をどの程度把握し得たかは不明である。また、調査時において、原材の元と末の把握もできなかった。

また、棺身の両端にあたる位置に、厚さ15cm、径90cm板材を、棺の小口をふさぐ様に置いた痕跡が認められた。先記の棺を覆うロームと崩落土の境面の状況は、棺身の径より1回り大きな材をほぼ直立させたものと判断され、木棺そのものの構造、棺の埋納方法等に関連するといえる。

棺の構造に関連するとすれば、棺は身・蓋とともに小口部まで貫通する状態で刺り抜かれ、棺と小口板とが別材で構成されたことが考えられる。

次に、棺埋納方法に関連しては、棺の安置に際し、その安定のために両端部に板材を立てたものと考えられる。

上記がとりあえず調査結果から推測される小口板、棺身の形態であるが、棺材そのものが存在せず、遺骸及び副葬品の位置、土壤内埋め土の状況等を総合的に勘案したとき、本例を割竹形木棺とすることが許容されるといえる。

### 3) 遺骸及び副葬品（押図8）

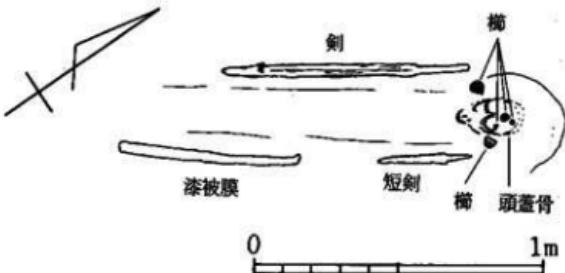
棺の北端部から90cm程棺中央部寄った位置から頭蓋骨の残片が出土した。残存状態はきわめて悪く、頭骨の皮膜が褐色になって残り、その内部は粉状となり元の組織の観察も困難な状態であり、検出時に頭骨の形態を判断できる程度であった。また、頭蓋骨に伴って犬歯・臼歯など10本程が残存していたが、頸部以下の骨は痕跡すら確認できなかった。なお、出土した歯のうち何点かは全体形の残るものもあり、鑑定等の実施により性別等の判断も可能と思われるが、現段階では、未実施のためその判定はなされていない。

頭蓋骨の検出状況から、遺体は棺の中央部よりやや北側に寄った位置に、仰むけで安置されたと判断される。

次に、副葬品として、剣・短剣・漆皮膜・櫛があるが、棺内に納められた副葬品はきわめて少量といえる。それらは、頭蓋骨周辺に櫛が、遺骸の両側に剣と短剣・漆皮膜が、いずれも棺底より出土した。

剣は、棺西端の遺骸に沿って置かれ、切先を足側に向け、柄部を頭蓋骨の横にあたる位置とし、ちょうど被葬者の右腕に沿って置かれたことになる。剣の全長は83cmを測り、調査時において、鞘の本質部が銹化して身に付着しており、さらに、切先から約4cmの位置まで、本質部の痕跡が認められた。また、柄部木質の残りは悪く、茎の状態が観察でき、それは若干の反りがあり、反りの内湾側を遺体側に向けていた。

短剣は全長30.4cmを測るもので、遺骸東側より出土した。剣と同様に切先を足側に向け、茎の位置が頭部横にあたり、遺骸を狭み剣と同位置に置くことを意識していると判断される。また、全体に鞘の木質部が銹化し付着していた。



挿図8 埋葬施設遺物出土状態平面図

短剣の切先から足側に28cm離れ、短剣とほぼ直線上の位置に、長さ63cm・幅4mmの板状に漆皮膜が出土した。全面に黒褐色の漆が塗られたもので、内部は空洞状の部分もあり、木あるいは竹のような有機質材料による製品であるが、その原形等不明な品である。

櫛は、頭蓋骨周辺から複数出土している。いずれも竹製の黒漆塗りの堅櫛である。いずれも歯と結束部が分離し、結束部の漆のみが残存するものもあり、かつ破損の著しいものが多く、総数の確定は困難であるが、10点前後はあったと推測される。出土状態としては、頭蓋骨上部・同側部・同下部のそれぞれによりあり、結束部の多くは、埋葬時の原位置に近いと判断される。また形態はほとんど同一であるが、大きさは大小2通りに大別されるが、その出土位置等から、本来被埋葬者が装着していたものと推測され、埋葬時に副葬品として、意図的に棺内に納められたものではないと考えられる。

棺内に確認された副葬品は以上すべてであるが、頭蓋骨周辺に少量の朱が散在して検出され、その状態等から埋葬時（死亡時）に、頭部に限定して施朱した上で棺に納められた状況が推測できる。

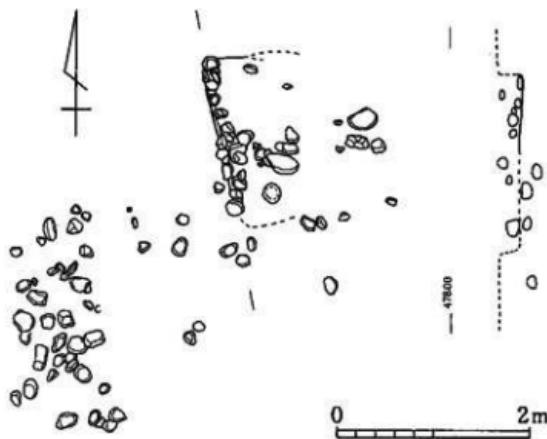
頭蓋骨及び副葬品のいずれもが、検出された棺底（ローム面）に接しており、その間に5mm程の軟らかい土の存在が認められた程度であり、棺材の厚さ等も推測することもできなかった。

## 6. 墓頂部施設

### 1) 墓頂石列（挿図9・10）

調査当初、墓頂の表土を剥いだ時点で検出した石列と、集石状の遺構とがあり、別個の施設なのか両者が一体となった施設なのか半断はできかねる。しづれも地表から石までが、ごく浅く、耕作による擾乱が著しく、原位置を保つ石はわずかである。石列は直列で、1.6mを確認し、そ

の方位はN12°Wを示す。石の大きさは、人頭大を最大とし拳大前後の礫まで用いられ、2~3段積み上げた状態の確認された部分もある。全体の残存状態はさわめて不良であるが、直線的に並ぶ石の状態から本来は方形を成していたことも考えられる。石列の外側に掘り方が確認でき、方形の掘り方に壁面に沿って石を積んだ施設と推測される。石の下に部分的ではあるが、固い面があった。

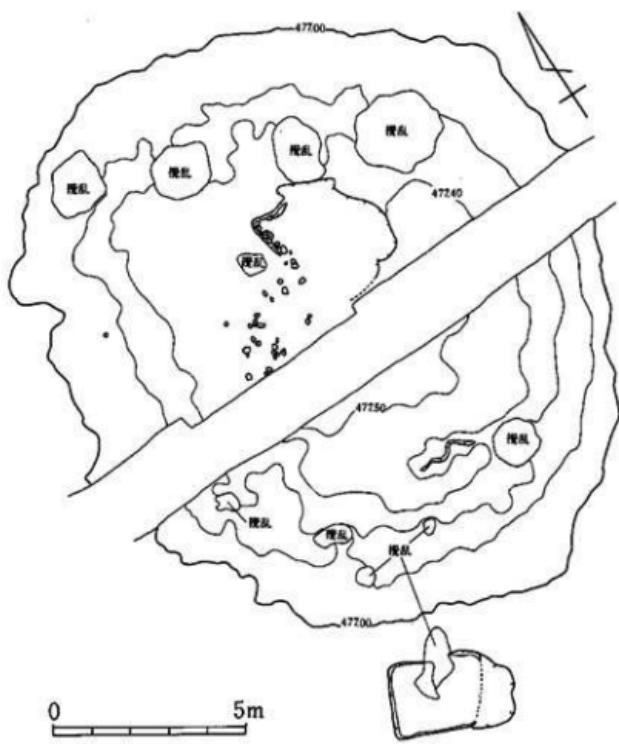


插図9 墳頂石列平面図

石列本来の姿を把握することはできなかったが、その内部と推測される位置の、礫が検出された面から須恵器罐が破片となって出土した。また、須恵器出土位置から約1m離れて、朱の痕跡を4ヵ所程確認した。これらの状況から当初本墳の中心となる施設の痕跡と判断したが、本墳の主体部は前記のとおりであり、従的な施設と捉えざるを得ない結果となった。また、石列の西側約2mの位置に、同じく人頭大の礫による集石があり、その上部には多量の炭が検出された。耕作による擾乱を受け、全体形把握も困難であり、炭以外の出土遺物もなく時期決定は困難であるが、土層状態は、前記の石列と同様であり、この2者が同時期の施設であった可能性も強い。調査結果から両者が関連したものである可能性があり、二次的な埋葬施設、もしくは墳頂上における祭祀に関連した施設等が考えられる。また、その時期についても出土須恵器罐から見て本墳築造時とのあまり時間差のないものと判断される。

## 2) 墳丘南側方形落込み（挿図10）

墳頂の漆黒色土上面で検出した1.8m四方、深さ20cmの落込みである。覆土は漆黒色土、黄色土、褐色土が混合し、一層であった。土層状況から、盛土上部から掘り込まれたものと判断できるが、出土遺物は皆無であり、その掘削時期の判断はできない。本墳に直接関連する施設であることも推測されるが、後世の耕作等による擾乱であることも否定できない。



挿図10 墳頂部石列・南側方形落込み平面図

## 7. 周溝内施設

### 1) 南西周溝底遺物集中出土地点（付図1・第2～6図）

主体部の南西侧延長上にあたる周溝内より、土師器・須恵器が集中して出土した。一部後世の攪乱のため、本来の位置から移動しているものもあったが、主体部の延長線上を中心として約20mの範囲内の周溝内壁寄りから出土したものである。本墳出土土器の大半はここからの出土である。

出土状態としては、周溝底に密着するもの、葺石上に載るもの、葺石間に入り込むもの、転落した葺石下にあるもの等様々であるが、基本的には周溝内埋土の最下層からの出土である。

土師器・須恵器のいずれもが破片となって出土したもので、完形品は1点も無い。すべて意図的に壊されたと推測される。

出土量は土師器が圧倒的に多く、高杯を主体に杯・甕・小形壺等がある。須恵器は、樽型甕・小型甕・高杯があり、祭祀的な色彩が強く感じられる。

主体部との位置関係及び出土層位から、本墳築造時における祭祀をうかがわせる遺物の出土状態といえる。

### 2) 馬齒出土地点（第6図）

北西側周溝内の周溝外壁に沿って轡・馬齒が出土した。

馬の歯は、周溝底より35cm浮いた位置から、轡はそのすぐ東側10cmの位置に歯より約10cm高い位置から出土し、周溝埋土掘削中に発見されたものである。調査時には、それぞれ単独の出土として捉えたが、双方の関連する可能性が強い。

馬齒出土位置が周溝底より35cm浮いており、平面的にも周溝外端に沿っていることなどから、周溝がある程度埋没した段階において、残存する周溝底に安置されたもの、もしくは、土壤を穿って埋納したものと推測される。

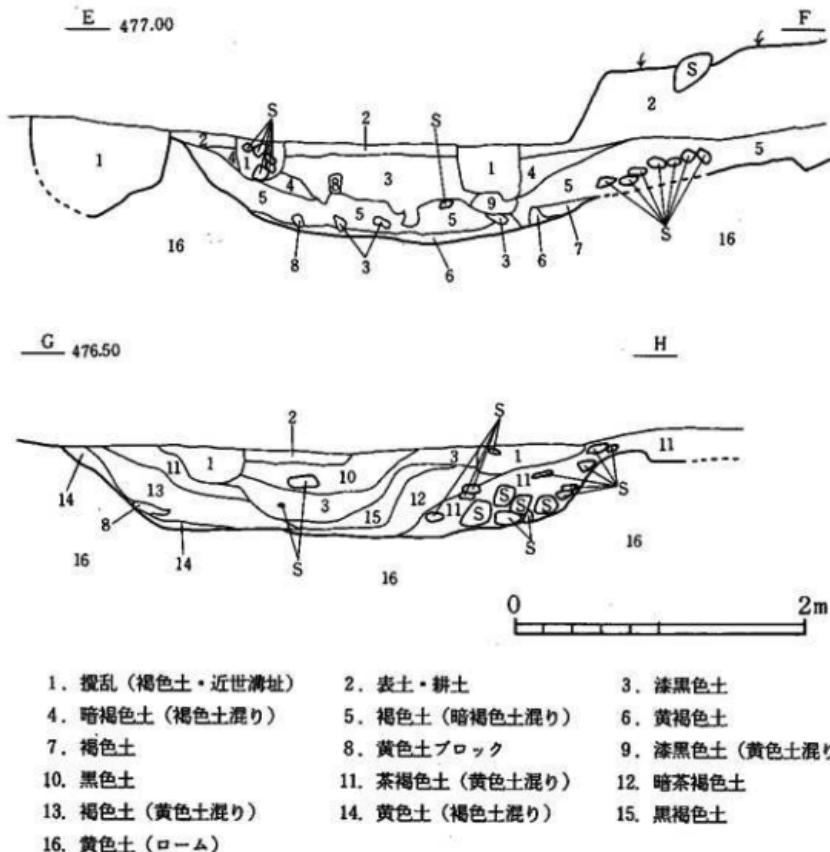
周溝の埋没状況がどの程度であったのか時間的な経緯は判断困難ではあるが、ここに馬を埋葬した時期は、本墳築造から一定期間置かれたものとしても、本墳と何らかの関係があったと推測される。

### 3) 土師器単独出土地点（付図1・第3）

西側の外壁ぎわの周溝内より、土師器甕の完形品が単独出土した。周溝の外壁に密着し、倒立して検出された。口縁部の位置が周溝底より40cm浮いており、周溝がある程度埋没した段階で、

この位置に安置されたか、埋納されたかのいずれかが考えられる。土器がまったく破損していないこと、倒立した壺の底部側内部の約1/2が空洞となっていることから、長期間空気中に放置されていたとは考え難く、穴の中に埋納されたと判断される。

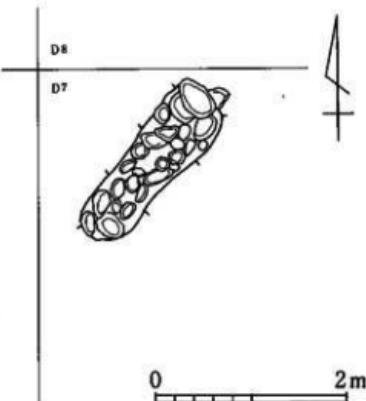
また、馬の歯と本土器は直線で約5m離れてはいるが、周溝外壁ぎわという位置及び出土層位の共通性から、互いに関連したものである可能性が強い。



挿図11 周溝土層図（点は付図1と一致）

#### 4) 周溝内石敷（挿図12）

北西溝側周溝内で $2 \times 0.5\text{m}$ の範囲に径40~15cmの石を平面的に並べた遺構を検出した。周溝底部より30cm前後高く、中央を凹めて並べてあり、墓址と推測した。長軸方向はN40°Eを測り、墳頂の墓壙とはほぼ同方向であり、石は北東側に大きな物を使用している。周溝が埋まつた段階で、葺石転石を利用して作っている。周溝埋土掘削中に確認されたもので、その掘り方等の状況を把握することができなかったが、本来は一定の掘り方があったと判断される。構築時期等は出土遺物もなく判断できないが、本墳と関連する施設ではなく、後世のものとみられる。



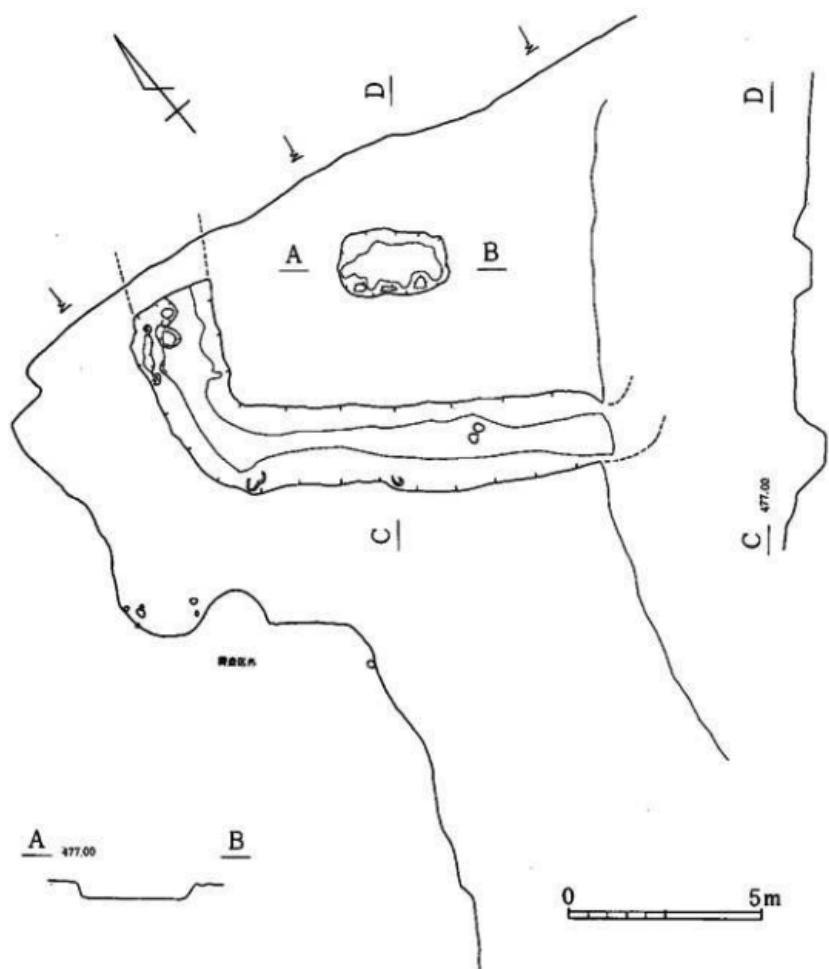
挿図12 周溝内石敷

#### 8. 方形周溝墓（挿図13・第12図）

物見塚古墳の北西に検出され、段丘崖上に古墳と並んだ位置に構築されたものである。南西溝は古墳周溝に切られており、北側の一部は用地外のため、ほぼ $\frac{1}{2}$ を調査しただけである。溝そのものは、南西溝のほぼ全体と、北西側の一部を調査した。全体規模の把握はできないが、南西溝の状態から溝外側の一辺の長さ15m前後の方形周溝墓と判断される。周溝幅は2.1~1.7m、深さは70~40mであり、断面形はやや緩いU字形を呈し、底部はほぼ平坦である。周溝覆土はほぼ3層に分かれ、中央の中層から上に漆黒色土が入っており、下層は褐色土から基盤のロームに近い土であった。

墓壙の位置は、周溝内側西隅より5mの位置に検出されたが、全体での位置は不明である。掘り方は $2.7 \times 1.5\text{m}$ の隅丸長方形で、深さは検出面から30cm弱と浅い。検出面から地表まで20cm前後とわずかなため、墓壙の覆土上部には耕作の攪乱が入っていた。棺の構造等詳細な埋葬形態の確認はできなかった。墓壙の方位はN48°W、南西溝の方位N53°Wを示し、5°のずれがある。

遺物の出土はいずれも同周溝内からで、須恵器、土師器、石器がある。底部穿孔の須恵器甌が北西周溝の西隅寄りの覆土中から正位で出土した。土師器壺2は、南西周溝の南隅近く、覆土下層から逆位で出土し、ほぼ完形である。周溝西隅近くに、土師器片が集中して出土し、壺、高杯などがある。



插図13 方形周溝墓平面図

全体の調査を成し得たわけではないが、本周溝墓の東側溝が、物見塚古墳の周溝に切られており、古墳に先行する墳墓として方形周溝墓の構築されたことが確認された。また、周溝内より出土した須恵器、土師器の内容から、物見塚古墳とはかなり近い時代に構築された墳墓といえ、両者の強い関連性を考えることができる。

## 9. その他の調査（挿図14・第12図）

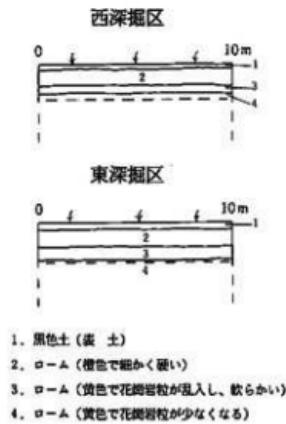
八幡原遺跡においては、以前にマイクロブレイドが表面採集されたと伝えられており、先土器時代に関連する遺構・遺物の検出されることも予想されたために、病院建設用地内の2ヶ所において、ローム層を掘り下げての調査を行なった。調査地点は、前述マイクロブレイド出土地点が不明であり、また、今回実施した試掘調査においても関連資料を見い出すこともできなかったこともあり、物見塚古墳をはさむ任意の2地点に調査地を設定した。

物見塚古墳西側の調査地点は、古墳の北西90mにあたる飯田市鼎2638番地内の、10×10mの範囲についてローム層まで掘り下げた。土層の状況は、挿図に示したとおりで、厚さ25cm前後の黒色土の下層に若干の漸移層があり、その下層はローム層となり、最深部で地表下150cmまで掘り下げた。黑色土直下の厚さ80cmはローム層中に花崗岩の風化粒を含み、二次的な堆積状況を示し、それより以下は、粘質の強い淡黄色を呈するローム層である。

出土遺物としては、黒色土（表土）中より打石斧の欠損品1点と近世の鉄砲弾とみられる鉛玉1点があるのみで、先土器時代に関する資料は検出されなかった。

東側調査地点は、古墳の南東140mにあたる飯田市松尾410番地に、前者と同様に10×10mの範囲を最深部で200cmのローム層まで掘り下げた。土層の状況は、西側調査地点とほぼ同様であり、地表下190cm以下は粘質の強い淡黄色を呈するローム層であった。

東側調査地点よりの出土遺物は皆無であった。



挿図14 深堀区土層略図

## 10. 遺物

### 1) 物見塚古墳出土遺物（第1～11図）

#### (1) 埋葬施設副葬品

埋葬施設からの出土遺物の量は少ないが、いずれも棺底に接して出土しており、埋葬時に副葬品として棺内に納められたものと判断される。

#### 剣

仰臥した遺体の右体側に沿って置かれたものである。検出時には、剣自体から発した鋒が鞘の木質部に付着し、先端部では、剣の鋒から約4cm離れた位置に鞘尻を確認した。

剣の全長は83cmを測り、刃長67cm、茎16cmより成る。刃部は元幅4.5cm・中間38cm・先幅3cmでその位置から2.5cmで鋒となり、元の重ねは0.7cmである。現時点の重量は750gを測り、刃部の断面形は、稜のある菱形を呈する。

茎には、若干の反りがあり、長さ16cm、区ぎわの巾3.3cm・茎先部から4.7cmの位置に目釘穴があり、もう1個区寄りにもあると推測される。

#### 短剣

剣と対応する遺体の左側の頭部寄りに置かれたものである。刃長22.5cm、茎長7.9cmで全長30.4cmを測る。刃部は元幅23cm、先幅1.8cmで、その位置より1.9cmが鋒となる。元部分の重ねは0.5cmを測る。

断面形は、稜のある菱形となる。長さ7.9cmの茎はわずかに反りが認められ、区ぎわの幅2.3cm・茎先幅1.15cmで先部の重ねは0.2cmを測る。茎断面形は長方形を呈し、茎端部から1.7cmに目釘穴がある。

全長30.4cmと短く、槍先との考えもできるが、副葬時の鋒が足方にあり、その柄の長さ等を考慮すると棺内での位置が不自然であり、短剣と考えるのが妥当といえる。

#### 漆被膜

遺体の左側沿いに短剣と直列して、それより下方に置かれたものである。漆被膜のみが残存したもので、茶褐色を呈している。出土時に一部破損したが全面に漆を塗っており、検出時に杖・弓等と推測したものであるが、具体的な原形・用途等は不明である。検出時の計測では、長さ63cm・幅4cmを確認したが、現状は乾燥により若干の収縮がある。現在の状況は、全体に破損が進んでいるが、全体の形状の推測は可能である。現在の長さは約60cmを測り、厚さは3mmである。両端部の幅が広く、中央部が狭くなる板状のものである。当初棒状の製品が土圧により偏平となっ

たとも考えられたが、両小口部及び両側縁部とともに、漆被膜の残存状態が角を成しており、本来板状の製品と判断した。端部の一方は、幅3cmの部分が25cm有り、その位置で横に細い線の刻みが観察される。それより中心寄りは、両側から順次幅を狭め、中央部での幅は2cmを測り、もう一方の端部は順次広がり、端部幅は3cmである。破損した被膜の内側は、縦位に細い線が認められ、漆の塗られた本体そのものは判断できないが、材料は木材の柾目もしくは、竹の繊維方向を示すと推測される。

### 堅櫛

いずれも頭蓋骨周辺から出土したもので、図化したものは7点であるが、調査時の状況から9点はあったと判断され、それ以上の点数があったことも考えられる。細い竹ヒゴで形を作り、黒漆を塗った堅櫛であり、すべて歯の部分は確認できない。残存部の状態から大型と小型の2つに分類できる。

1 図4は頭蓋骨の左側から出土し、上部はほぼ現存していると推測でき、漆片のみである。漆片の形態から見て、竹ヒゴをU字形に曲げ頂部から3.2~2.3cmの間を、横に糸で巻き歯の間も一枚毎に糸で止めてある。残存部の横幅4.5cm、縦の長さは3.5cmを測り大型である。歯の長さは推測できないが、本数は想定でき35本前後であり、左耳の周囲を飾っていたと判断される。

5は頭蓋骨の右側から出土し4とはほぼ同じ形態で、残存状態も同様であり、同使用法が推測できる。

6は小型で、頭蓋骨片を取り上げ少し掘り下げる所で中央から出土した。漆幕は縦1.8cm横2.3cmで、頭髪の後ろに飾られていたものであろう。

8と壊れた一点は6の近くで出土し、同形、同使用法が推測できる。

頭蓋骨の上から出土した物は7・9・10があり、9は2個体と推測されるが、破損したため確認はできない。残存部の寸法は4×3.5cmで大型に類する。

7・10はそれぞれ2.2×1.5cm・1×1cmを測り、6と同形の小型に類する。

### 2) 墓頂部出土遺物(第2図)

墓頂部の石列部より、須恵器越及び朱が出土している。越は、いくつかの破片となって出土し、それが残存する。小型越である。口縁部、胴下半部を欠くが、残存部により計測される寸法は、頭部4.6cm、胴部最大径10.7cmである。頭部はわずかに残り、波状文が、胴部には2本の沈線とその間に波状文を施している。

外面肩部には、自然軸がかかり、内面の肩部は絞り痕が認められる。胴部はロクロ痕があり、底部には指頭圧痕が認められる。

陶邑編年Ⅰ期最終段階にあたるTK47期と判断される。

### 3) 周溝内出土遺物（付図1・第2～11図）

周溝北東側からの遺物出土ではなく、南～西側からの出土が多かったが、部分的に集中する所があり、須恵器、土師器、馬具、馬の歯、鉄器、銅鏡なども出土している。

#### ①南西周溝底遺物集中出土地点

須恵器は鶴、樽型鶴、高杯が出土している。いずれも破片となっており、中には10数cm離れて接合するものもあった。

図2は小破片となって広範囲から散在出土したが、ほぼ完形に復元された。高さ10.7cm、口径7.2cm、胴部径11.2cmを測り、胴中央よりやや上に穴を有する。口縁の多くを欠くが、高さは確認できた。外面の調整は、比較的シャープに成されており、肩部から胴上にかけて自然軸がかかり、底部は穏やかな丸底である。底部には火燐が1本ある。穴は整形後あけられており、外側はなでられ内側は粘土にかえりがある。胴部の内側には、絞痕と箇なで痕が残っている。

3は西から出土し、頸部から上を欠く。2と比較するとやや大きく、肩部から底まで8cm、胴部径12cmを測り、穴は洞部最大径より上に位置する。肩部から上部に自然軸がかかり、調整痕は胴下部まで箇横なでで、底部は箇削りである。底部に2本の火燐があり、内側には絞痕、横なで、箇削痕が残る。穴は器形調整後あけ、内側に比較的大きなバリが、外側に小さなバリが出ている。

樽形鶴4も他の遺物同様に細かく破損して出土し、5の須恵器高杯と混在して出土した。口縁部の屈折部より上を欠くがほぼ完形であり、現存部の高さ18cm・胴部長軸19cm・胴部径14.9cmを測る。整形はシャープで、口縁・両側・胴部の凸帯は特に顯著である。胴部の凸帯に囲まれた3ヶ所は櫛状工具による波状文を施し6本以上の施文具を使用する。穴は胴上部で口縁のほぼ中央を垂下した位置の、外側からあけており、内側にバリが出ている。口縁から胴下部に自然軸が厚くかかり、胴上部の波状文の多くが隠れている。側面の凹んだ部分は箇痕が残り、削り取った痕跡が確認できる。内側は縦のロクロなので後、口縁をめ込んでいる。

須恵器高杯5は、4の樽形鶴と混在して出土し、ほぼ完形に復元された無蓋高杯である。同溝南の転落した墓石の上下・間に入っており、細かく破れていた。高さは、12.5cm・杯部径7cm・脚部径5.5cmを測る。全体はシャープに仕上げられており、杯部には3条の凸帯と1条の波状文帯がある。形式的な把手が2カ所に付けられたもので遺在したのは一方のみであるが、他の方も付着痕跡が確認される。波状文はほぼ全周残っており、凸帯を箇で作りだした後施文し、耳を付けている。杯部は全体に薄く作られており、自然軸は杯部内側にかかっている。脚部の透し穴は三角形で4カ所に、整形後表からあけられている。全体に丁寧な作りであるが、脚部は焼成時が歪みが著しい。

土器は復元されたものだけで、40余個あり総数は50個は下らないと推測され、壺、鉢、壺、壺、高杯、器台等である。

2図6の壺は溝底近くから、破片で出土し、ほぼ完形になった。口縁部15.7cm・頸部13.3cm・胴部24.5cm・底部5cm・器高27.2cmを測り、口縁部は長さ3.5cmで頸部から外反する。胴部は器形で最大径を持ち、器高の中央である。底部は小さくあげ底になり、あげ底は胴下部の粘土を籠で集め、回りが高くなっている。胴外側に黒斑と炭化物が、付着しており実用に供されたものである。

3図2は壺底部と判断したが、内側底部近くに箇削り痕が残り杯の可能性もある。残存胴部径15cm・底部4.5cmを測り、外側はイネ科の植物の茎でなでられており、底部は籠なでがされている。

鉢には3図3・4・5の3点があるが、瓶の可能性がある1点のほかは杯として分類すべきともいえる。3は全体の約1/4残っているが底部を欠き瓶の可能性もあり、口縁部20cm・残存胴下部13.5cm・残存器高9.5cmを測り、内外壁共に籠磨きが残っている。

4は約1/4が残存する。残存胴上部12.6cm・底部5.7cm・残存器高5cmを測り、内外面に籠なでが残り外面はなでも残る。残存胴上部は薄くなっている。

5は半欠品で、残存胴上部10.3cm・底部3.4cm・残存器高3cmを測り、内面に籠なで、外面に籠なで、底部は粘土を絞りながらひねって切りとっている。

壺と確認できたのは、7個体3図6~10、4図1・2である。

6は小型壺で約1/4現存する。口縁部5.2cm・頸部4.2cm・胴部最大径7.8cm・底部3cm・器高7.9cmを測る。口頸部は肩部から、やや内反して立ち上がり、上1/3がやや外反して収束し、胴部最大径は器高の1/2からやや上にある。調整痕はなで主体であり、口頸部から胴上部が横・胴下部が斜、胴内側が乱れであり、底部は乾燥台痕が残っている。

7は破片で出土し、口唇部を欠くがほぼ完形である。残存口縁部9.5cm・頸部7.5cm・胴部14cm・底部4cm・残存器高14cmを測り、胴部最大径は器高の半分に位置する。調整はなであり外側は口縁縦と横・胴部横・底乱れ、内側は口縁横・胴部乱れであり、2次焼成を受けている。

8は破片で出土し、口唇部と胴下部を欠くが図化部はほぼ現存しており、黒斑が著しく残っている。口縁の残った部分で10.7cm・頸部9cm・胴部18.2cmで、底部の形態は不明である。口頸部は緩やかに立ち上がり、胴部最大径はその上半分にある。調整痕は内外面共に横なでである。

9は、図化部の1/4が残存し、口唇部9.2cm・頸部8.5cm・胴部17.1cm・器高残存8cmを測る。口縁は頸部から立ち上がり、最後に少し外反するがほぼ直立する。最大径は、胴中央にあると思われる。残存部は薄く仕上げられており、口頸部の内外面と胴部の外面は籠横磨き、胴部の内面は籠なでが成されている。

10は9の壺とほぼ同形であり、図化部の3/4現存している。口唇部9.7cm・頸部9.2cm・残存する胴部の径15.5cm・残存器高6.7cmを測る。口縁は頸部から立ち上がり、胴部は球形を成すと推測され、残存部は口頸部と胴部外面に、籠磨き痕が顕著に残る。胴部内側には輪積み痕が残り、横なでの調整である。

4図1は、 $\frac{1}{2}$ 現存しており胴部最大径14.7cm・底部径4.2cm・残存器高10cmを測る。器形は球形を成すと考えられ、調整は胴部外側が旋磨き・底部が鏽なで、内部が乱れなでである。

2は壺と想定したが、底部3.8cm・器高残存4.5cm・胴存部11~10cmを測り、胴下部は著しくゆがむ。底部は凸状を成し、調整痕は外面なで・内面鏽の乱れなでである。

杯は図化したものが16個体あり、ほかにも破片が多くある事から、総個体数は20個体を越えると思われる。西~南側で出土しており、周溝の底部と転落した葺石の上下からが多かった。特徴を概観すると大きく5つに別れる。

4図3~7は胴部が立ち、口唇部が外反する。4~6の内側は旋磨きが残っているが、現存部は $\frac{1}{2}$ ~ $\frac{1}{3}$ である。

8はほぼ底部が残存し、外面は旋磨き内面は横なでである。

9~12は底部が丸く、口唇部が外反する。9は外面口縁に沈線が残り、底は削りで器壁は横・乱なでであり、胴下部に黒斑が残る。10はほぼ完形で、底は胴下部から削りで成されている。胴外部と内部は横なでであり、内側底部は旋磨きの乱れがあり、底ぎわに黒斑が残る。11~12はほぼ同じ形態であり、内面に暗文風旋磨きが残る。11は外面の口唇部 $\frac{1}{3}$ が横なでで他の窓なで、内面は横なでである。12は他に較べて器高が低く皿状となる。 $\frac{1}{2}$ 残存するのであるが、外面底部は削り、口唇部までと内側は横なでである。

4図13~17は明瞭な底部を持つ形態であり、内面に暗文風旋磨きはない。13はほぼ完存するが、ゆがみが著しい。底は粘土を石にねじり切っておりやや突出し、調整は底近くがなで、胴部中央が削り、口縁と内側が横なでで内側底部に窓なで痕が残る。外側底部ぎわに小さな黒斑がある。14はほぼ $\frac{1}{2}$ 残存しており、ゆがみが著しい。外面調整は、なでが主であり外面底部は、乾燥台痕が残り平らになっている。15は $\frac{1}{2}$ 残っており、復元実測の為、口縁は平らになっているが、残存部にはゆがみがある。底部は粘土がほみでており、窓でなでている。調整は外面が窓か刷なで、内面は口縁が横なで、底と近くが窓なでであり、胴部に小さな黒斑がある。16は口縁部の大半を欠き復元実測である。底部はやや突出し、調整は外面なで内面と口縁が窓なでであり、底に窓の痕が残る。17は杯としたが、底が大きく窓の可能性もある。底部5.5cm・胴残部8cm・残存器高3cmであり、調整は外面なで内面窓なでである。

4図18は他の杯と異なり、黒色土器で、 $\frac{1}{2}$ 残存しているがロクロを使って整形しており、外面は横なで内面は漆黒で暗文がある。底には糸切り痕が残り、奈良時代の混入品と思われるが、周溝の底近くから出土しており他遺構の存在が考えられる。

高杯の図示したものは22個体である。接合しない破片があるのでもっと多くの個体数がある。概観すると器形が大きく6つに別れる。

5図1~5は、杯部にやや稜がついて緩く外反し、暗文が施される。脚部は杯部から下に向って緩やかに外反し、下部で急に外反する形態である。1はほぼ現存し、ゆがみがある。杯口唇部径18.4cm・脚端部径12cm・器高10.36~10.29cmを測り、杯部内外に暗文が残る。脚外部は旋磨き、

内部に絞り、箇削り痕が残る。2は $\frac{1}{2}$ 現存し、杯口唇部径18.5cmを測る。杯部内外に暗文が残り、脚外部は箇磨き内部には箇削り痕が残る。3は杯部・脚部わずかの $\frac{1}{2}$ が現存し、杯口唇部径18.9cm、外部は暗文と黒斑、内部は刷なで後暗文風箇磨きが残る。4は杯部 $\frac{1}{2}$ が現存し口唇部径18.9cm・外部は横なで主で縦なでが混じり、内部は暗文が残る。5は杯部 $\frac{1}{4}$ が現存し口唇部径19cm・内外に暗文が残る。

5図6～9は杯に稜がつき、暗文が施されるが杯部には個体差がある。6は口唇部を欠くが $\frac{1}{2}$ 現存し、稜部径10.3cm・杯残部高5.2cmを測る。稜は著しく突出、外面は暗文、内面は横なで後暗文風箇磨きが残る。7の杯部はほぼ現存し、口唇部径15cm・器高残部4.5cmを測る。稜部は目立たず外面は横なで後斜めの箇磨き、内面は暗文が残る。8は口唇部と脚部を欠くが、実測部は $\frac{1}{3}$ 現存する。杯部の稜はやや突出し、口唇部にかけて円形の胴部を成し、胴残存径14cm・杯高残存4.5cmを測り、内外面に暗文が残る。9は杯下部と脚上部が $\frac{1}{2}$ 残り、器高残8.9cmを測り杯外面と脚外面に暗文風箇磨きが施され、脚部内面は箇削り痕が残る。

5図10・11、6図1～5は杯部に明らかな稜の認められないものである。脚は現存しないものもあるが、杯の縦ぎめから円筒形を成し、据で急に広がる形態であり、箇磨きがある。10はほぼ半分現存しており、口唇部径16cm・接合部2.9cm・器高残12cmを測る。杯の底部と脚の内部に、箇なで痕が残っており、接合部にへそが確認できる。11もほぼ半分現存しており、口唇部径15.8cm・接合部径3.2cm・器高残11cmを測る。杯は内外面共に横なでで、脚部外面は縦箇削り後横なで、内面は箇削りでありへそが確認できる。6図1は杯だけであり半分現存、口唇部径20cmを測り内外面共に横なでである。杯部が大きく、大形の高杯である。2は口唇部と脚部を欠くが、実測部はほぼ残っている。杯胴部は丸みがあり、内面はなで外面は脚の近くが箇磨き、中間が箇削りで口唇部近くがなでである。3は杯下部の一部と脚が現存し、接合部径2.9cm・残存器高9cmを測る。杯現存部の内面はなで外面は横なで、脚部の内面は箇削り後なで外面は縦の箇磨きである。4はほぼ現存しているが、杯部はわずかに残るのみである。接合部径2.9cm・器高残部9cmを測り、杯内外面はなで脚内面は箇削りと横なでへそが確認でき、外面は箇磨きである。5はほぼ現存しているが、接合部径3cm・器高残部7.4cmを測り、脚内面は箇削りでへそと粘土のはみで確認できる。外面は箇磨きが施され、2次焼成を受けている。

6図6は杯部のみ現存し、高杯と推測されるものである。口唇部径13.3cm・器高残部5.2cmを測り、脚部は薄く丸くなってしまい、内外面は横なでがほとんどで外面下部に斜めのなでが残る。

6図7～10は高杯の脚部で、接合部から裾に向って広がり接地面は急に広がる形態である。7は現存しており、接合部径3.4cm・裾部径15.3cm・器高残高7.5cmを測り、内面は上部が箇削り中下部は横なで、外面は上中部が箇なで下部は横なでと小黒斑が残る。8は杯部との接合部が残り半分現存している。接合部径3.3cmで、杯と接する部分は脚の器壁が延びており、器高残部7.2cmである。内面上中部は箇削り下部は横なで、外面上中部は乱れなで下部は横なでであり、裾部径10.3cmである。9は $\frac{1}{4}$ 現存しており、接合部は欠ける。脚上部径3.3cm・裾部径11.5cm・器高残

高6cmを測り、内面上中部は笠削り下部は横なで・外面はすべて横なでである。10は裾部が現存しただけであるが、裾部径12cm・器高残2.6cmを測り、内面中部は笠削り下部と外面は横なで後、難な笠磨きが施される。

6図11は高杯の形態の1つであり、脚部は接合部から接地面に八字形に広く、杯内面はわずかの残りであるが、乱れなで後暗文を施している。脚内面の上中部は笠横削り、下部は横なで、外面は横なで後暗文が施される。

器台と確認したのは、1個体のみであるが土師器片が沢山出土しており、他に器台の存在する可能性もある。6図12の現存部はわずかであるが、口唇部径14cm・残存杯部高2.8cmを測り、現存部は横なでである。

以上が、南西部周溝内出土遺物であるが、その出土状況及びそれぞれの形態等からほぼ同時期の所在と考えられる。また、すべての資料が破片で出土し、それも意図的に破壊されたとも考えられる状況であり、いずれも本墳築造時に関連する土器群と判断される。出土須恵器4点は、陶邑編年でⅠ期前半段階にあたるTK73～ON46の範疇に含まれるものとみられる。

### ②馬歯出土地点

馬の歯、同レベルで、ほぼ30cmくらいはなれた場所から6図14の轡が出土しており、7図1～3は破片と思われ、周囲から出土したが、接合はしない。轡は中央で難ぎ、引手は1本の鉄を曲げて作るが、轡に接する部分は腐食している。図で左側の細線で示した金具は、轡の下側から出て付着している。轡は面とりをした角棒を使って作っている。それぞれの寸法は、轡長およそ21cmで両端を内径3cmで丸くしている。そこに長さ14cmの両端を丸くした、引手を取付いている。轡の素材はほぼ7mmの角棒を面とりし、引手は5mmの角棒で面とりしたものを作り曲げている。端の曲げて丸くした部分は、素材がやや細くなり円形になっている。

また馬の歯（6図13）は、上歯8本下歯2本と頭骨の一部が出土した所で止め、取り上げて来たのでクリーニングすれば、本数は増加するであろう。

### ③土師器壺単独出土地点

3図1の壺は周溝の外側に密着し、覆土上部から伏せた状態・完形で出土した。内側には空間があり、覆土は約半分入っていた。口縁部24.2cm・頸部23cm・胴部24.8cm・底部4.5cm・器高19.3cmを測り、口縁部と胴部はほぼ同径で口縁がひらく形態である。底部は小さくあげ底になっており、底部の高い部分は粘土を付着している。外側は横なで後、笠磨きを縦、斜に施しており、黒斑がごくわずか残り、赤色斑が残っている。内側の空間部分に植物の実の炭化物が付着しており、大きさからイネ科の植物が想定できる。内側は粘土の輪積痕と、頸部の下に横の笠磨きかなで痕が残っている。周溝外側に接して覆土の上部から出土しており、完存している事から周溝がある程度埋まってから埋納したものであろう。

#### ④その他（第7図）

周溝内の搅乱の著しい東南側より、鉄製品、鉄滓が出土したが、古墳に関連するか否かの判断困難なものである。

7図4は鉄環2個が付属するもので、鉄板を曲げた鉄製品であるが器種は不明であり、葺石よりやや浮いて出土し銹化が進んでいる。

5は鉄板を折り曲げてあり、欠失部が半分以上あるが全体形は把握できる。ほぼ1mmの厚さの鉄板であり中央に1cmの穴があり、葺石上部から出土し器種不明である。

6は葺石中から出土した鉄滓で、4×3.5cmと小さい。

#### 4) 墳丘・周溝出土混入遺物（第7～11図）

古墳と直接関連しないいくつかの遺物が、墳丘及び周辺より出土している。各種の石器、金属器類である。

周溝・墳丘盛り土等から出土した石器は磨製石斧・打製石斧・横刃形石器・敲打器等であり、磨製石斧7図7は墳丘盛り土中から出土しており先端を少し欠く。緑泥岩製であり敲打で形を整え、磨って作っている。打製石斧7図8～13・8図1～13・9図1～6は完形。破片合わせて25点あり、硬砂岩製19点・緑泥岩製6点である。

9図7は硬砂岩製で弥生時代の有肩扁状石斧の可能性もある。

横刃形石器9図8～15・10図1～3はすべて完形品で11点あり、硬砂岩製8・緑泥岩製3である。

敲打器10図4～7と把握したものは4点あり、内1点が緑泥岩製で他は硬砂岩製である。

磁石10図8・9、珪石片10図10、黒曜石片11図13・14がある。

石臼片11図1は墳頂の耕土から出土し、安山岩製の上白で、中～近世の臼である。

11図2～5の4点は器種不明であるが硬砂岩製3点と他は緑泥岩製である。

また墳丘南西裾の溝・道路址覆土から近世陶磁器片が出土している。

## 5) 方形周溝墓出土遺物（第12図）

調査を実施した南西及び北西の周溝内より、須恵器・土師器・石器出土している。

須恵器は、北西周溝内より出土した壺12図1で、底部は穿孔されるが完形品である。

頭部はほぼ直立し順次外傾して立ち上がり、中位で短く外折し、1条の突帯を有して更に外反し口唇部となる。肩部は、頸部とほぼ直交し、胴上位に最大径があり、底部へと至る。器高11.5cm・口縁部径8.7cm・頸部径4.2cm・胴部最大径11.8cmを測り、胴部最大径の位置に径1.2cmの円孔を有する。

口頸部内側と肩部上面に厚く自然釉がかかるが、頭部の突帯のほかの施文は施されない。

全体に丁寧な作りで、陶邑編年I期前葉に位置づけられる。

土師には、壺と高杯がある。壺12図2は、南西周溝の南隅寄りの覆土下層から逆位で出土したほぼ完形品である。

口頸部は外傾して立ち上がり、内湾して上方にのびる。胴部はやや扁平で、ほぼ中央部に最大径を有し、緩やかな丸底となる。口縁部径10.5cm・頸部径7.5cm・胴部最大径14.4cm・器高12.8cmを測る。

胴部外面は箇削り後難な横惚磨きが施され、内面はナデられている。内外面ともに赤褐色を呈し、1カ所黒斑部分があり、底部には二次焼成とみられる剥落がある。

壺12図3は、周溝西隣付近の土師器集中した箇所より出土したもので、胴下半を欠き、図示部分の $\frac{1}{4}$ が残存する。

壺2より、若干の大型品であるが、形態、調整等ほとんど共通する。口縁部径11.5cm・頸部径8.3cm・胴部最大径14.8cm・残存高11.7cmを測る。

高杯12図4は、壺12図3と同位置より出土し、杯部、脚端部を欠き、図示部分の $\frac{1}{4}$ を残存する。脚部中央が緩くふくらみ、端部が急に外反する形態である。残存部高8.0cm・中央部最大径4.8cm・外反掘折部径5.2cmを測る。

石器には12図5～7があり、5は表面に段の付く滑石製の紡錘車である。南西側周溝中から出土し、直径4.3cm高さ1.5cm穴の直径0.7cmを測り、表面の段は7段あり装飾の為に付けたものであろう。6は磨製石斧の破損品で、厚さ1.3cmの表裏と側面に擦痕が残り、綠泥岩製である。7は硬砂岩の破片で器種は不明である。

## IV ま と め

調査の結果得られた事実は以上のとおりであるが、その主体が物見塚古墳にあったことは言を持たない。

物見塚古墳の調査前の状況としては、過去において、わずかの土師器片が採集されたことが伝えられていた程度で、具体的な実態はまったく不明といえ、その立地場所から古墳以外の中・近世の施設ではないかとの考えもあった。調査の結果は本文中に記したとおり、そうした疑問をすべて払拭し、当地方における中期を代表する古墳の1つとしての位置づけがなされた。

飯田下伊那地方の古墳は、約700基の存在が知られ、その有様は中・北信における初期の古墳のあり方と対比され、中・後期に主体のある地域として、近年各方面より注目されているところである。

中でも、横穴式石室を有する前方後円墳の多い点が特徴的に取り上げられることが多いが、大多数を占める円墳の位置づけは充分になされてはいないのも実情といえる。

こうした円墳の中には、当地方における初現期の古墳が存在することも近年論議されつつある。当地方における初現期の古墳は、いずれも5世紀代の築造とされる竜丘兼清塚古墳、あるいは松尾妙前大塚古墳等が考えられている。

そのような状況下において、本物見塚古墳の調査実施がなされたわけであり、その結果は現時点において、妙前大塚古墳等と同時期に位置づけられ、当地方最古の古墳の1つとして位置づけが可能といえる。

一方、本墳は出土遺物の内容等から、典型的な中期古墳の姿を認めることができるとともに、地域的な特殊性ともいえる様相も兼ねた古墳といえる。それらについて、若干の整理を行ない本書のまとめとしたい。

### 1. 墳丘規模

本墳の特徴とは言い難い面もあるが、墳丘規模について若干の整理を行なう。

調査結果により示された本墳の規模は、周溝外径で36m、内径でも30mを測る。

下伊那史に記された墳丘規模は、径18.2mとされ、当地方に存在する円墳のうち35番目とされている。しかし、それらの規模は地表面に残された盛り土の観察によるもので、その立地等により、残存状況の差があり、発掘調査等により築造時の規模を把握したものではない。また、近年大型の円墳とされるもののいくつかは、帆立貝形墳であることが確認され、円墳の規模としては本墳の順位はかなり上位となる。

本墳の調査結果による周溝外径は、下伊那史に記された数値の倍の規模となり、当地方の円墳を代表する1つといえる。

一方、墳丘高については、平面形の大きさに比べ、意外と低い感じを受けるが、これも本墳の特徴の1つとして捉えることができ、それが本墳の築造法等に大きく関わっているといえる。

## 2. 築造法に関する

埋葬施設及び墳丘盛土については本文中に記したとおりであるが、これらが本墳の最大の特徴といえる。

本墳の築造にあたっては、まず第1に埋葬施設の構築がなされ、続いて被葬者埋葬後に盛り土を行なっている。

墳丘を構築する以前に、埋葬そのものが行なわれているわけであるが、埋葬施設は墳丘全体におけるほぼ中央に位置しており、盛り土作業実施時にその位置が明らかになるよう何らかの手だてが講じられていたといえる。

その方法について具体的に明らかにする術はないが、いくつかが考えられる。1つは事前に周溝を掘削もしくは掘削位置を決定した後に埋葬位置を確定したと考える場合。1つは、埋葬後その位置に何らかの目印をした上で、周溝掘削・盛り土をしたと考える場合であるが、今回の調査によりそのいずれかを決する材料を得ることはできなかった。

いずれにしても、本墳の築造にあたっては、土括掘削後、埋葬、墳丘盛土、基底部への石積み等が一連の作業として行なわれていることは明らかといえる。

本例は、和田晴吾氏による掘込墓拡C類の典型といえる（注1）。

和田氏によれば、古墳時代前期・中期の古墳において掘込墓拡A類が畿内・古墳的であるのに対し、掘込墓拡C類は在地的・伝統的なものとし、畿内及び周辺部の葬制差を指摘されており本墳はその代表例の1つといえる。しかし、当地方における類例がほとんどなく、存地的・伝統的な葬法とするには今一つ資料不足である。なお、当地方において伝統的な墓制として方形周溝墓があるが、埋葬施設と盛り土との関連を把握し得たものはほとんど無い状態であり、周溝墓と本墳との関連は今後の研究課題といえる。

## 3. 埋葬施設について

本墳の埋葬施設が粘土部内に割竹形木棺を納めたものであったことは本文中に記したとおりである。本県において、粘土棺及び割竹形木棺が明瞭に確認された初見といえる。しかし、既調査例のいくつかは、その残存部分の形状等から割竹形木棺と判断可能なものがあり、そのいずれもが本墳とほぼ同時期にあたり、本県へこうした葬法の流入、定着の時代を示している。

西日本において一般的には、前期古墳の特徴とされるこうした埋葬施設形態が、中期段階に本県で出現することは1つの地域的な特徴として捉えることができる。このことは、本県に限定されるものではなく、岩崎卓也氏によれば、東日本全体にわたる傾向であり、それがこの時代における大和王權の地方進出のあり方を示すものといえる。

このことが、長野県の古墳時代における地域毎の様相差の1つとして、中・北信における前期古墳と南信における中・後期古墳の卓越したことにも深くかかわっている可能性が高い。

#### 4. 副葬品

本墳の副葬品として捉えられるものは、棺内より出土した剣・短剣・漆塗不明製品のみである。なお、被葬者の頭蓋骨周辺より出土した豎櫛については、被葬者に装着して埋葬されたものであり、いわゆる副葬品とは別の性格と考える。

副葬品の内容としては、きわめて単純というか簡素なものであり、当該期の他の古墳副葬品に比べれば貧弱といわざるをえない。

貧弱な副葬品の内容が本墳の特徴ともいえ、これが本墳被葬者の生前の姿を推測する根拠となりうるともいえる。

#### 5. 周溝内出土の土器

周溝内より出土した遺物は、副葬品の貧弱な内容に比べ、時代の先端を行く須恵器の良品があり、これが本墳の時代決定の材料となる。

周溝内の遺物出土位置は、南西端部から单独で出土した壺形土器以外は、南側周溝内に集中し、その状況はすべてその場で破壊・投棄されたものと判断できる。

また、出土遺物の内容は、土師器は壺・高壺・小形壺など、須恵器は壺・樽形壺・高壺であり、いずれも供獻用の器と判断できるものである。

これらの土器類は、溝底から墳丘据部の葦石間にあり、この場でなんらかの祭祀を行ない、この場に投棄されたものといえる。その出土位置・出土土層から、古墳築造直後すなわち古墳完成時に行なわれた墓前祭祀に用いられた土器類と考えられる。

次に、南西端周溝内より出土した完形の壺形土器は、周溝外壁ぎわの溝底からは30cm程浮いた位置に直立して出土したもので、その状態から、周溝がある程度埋没した階段、つまり、古墳築造時より若干遅れてその場に安置もしくは埋納されたと考えられる。南側周溝内に集中して出土した土器群とは時間的な差があり、その性格も異なり、約5cm離れた位置に検出された馬齒との関連も考えられる。

## 6. 周溝内出土馬齒・馬具

本文中で記したように、出土状態等により、古墳築造時から若干の時を経て埋葬されたものであるが、確認されたのが齒のみであり、馬体のすべてを葬ったものか、頭部のみであったかは判断できない。しかし、当地方において、古墳に関連しての馬の埋葬例は、いずれも馬体全体を埋葬しており、本例もその可能性が高い。

また、馬齒出土位置の上部から出土した骨は、その出土位置から同時に埋葬されたものといえるが、埋葬時馬体に装着されていたのか、埋葬時には取りはずしたものをその上部に副葬的に供えたものかの確認はできなかった。しかし、いずれであったにしても、出土骨が埋葬馬の生前に使用していたものであったことは間違いないといえる。

なお、当地方においては、古墳への殉葬馬の例がいくつかある。その代表的なものとして、飯田市座光寺新井原12号墳に関連する土括墓があり、これは、f字形鏡板骨に代表される馬具一式による飾り馬を埋葬したものであり、出土馬具及び新井原12号墳の年代から5世紀後半の時代と考えられる。

本例が、馬具装着馬であるとすれば当地方2例目といえ、出土骨の形式からみて、新井原遺跡の例よりは先行する時代にあたり、当地方で最も古い殉葬馬ということができる。

## 7. 方形周溝墓と物見塚古墳

物見塚古墳と重複して検出された方形周溝墓は、その東側周溝を古墳の溝によって削り取られており、古墳より先行するものである。

しかし、周溝内から出土した土師器・須恵器は、古墳周溝内出土品とほぼ同時期と判断できるものであり、この2つの墳墓は、同一集団の連続した首長墓と考えられる。

当地方の、規模を限られた集団における首長墓のあり方が、この時期において、周溝墓から墳丘を有する古墳へと変遷する姿があるといえる。これは、古墳築造の1つの画期を示すといえ、当地方において小集団による古墳築造の開始期をも暗示している。

以上、本墳にかかるいくつかの特徴とそれらから派生する今後の研究課題のいくつかを整理したが、これらはもちろんそれ以外にも様々な観点で当地方の古墳及び古墳時代研究に大きな示唆を与える古墳である。

そこで、本墳の性格等について概括し、最終のまとめとする。

本墳は、八幡原段丘面の北端段丘崖上にあり、この位置は下位に2~3の小段丘をはさみ、天竜川支流の飯田松川に面している。この位置において、本墳を築造した人々の集落を求めるのは容易ではない。それは、本墳の築造された段丘面上には、今回の調査はもとより、既出の該期資

料も皆無であり、集落の存在は否定せざるをえない。また、直下に存在する中位の段丘面上においても、過去数回行なわれた猿小場遺跡等の発掘調査による該期資料の出土は皆無であり、これもまた、集落の存在が否定される。

該期集落の存在が確認されているのは、さらに下位にあたる鼎下山・中平の低位段丘上、あるいは、東方段丘崖下に展開する松尾八幡町のいずれかである。このうち、八幡町は、段丘の直下にあたるとはいっても、本墳の位置が東側段丘端部からかなり内側に入るため、その直接的な関連性は求め難い。地形上のつながりからすれば、北方の松川に面した下位段丘上の下山・中平地区の集落が本墳築造に関与しているといえる。しかし、この集落においても、中間に位置する猿小場遺跡等の所在する段丘により、古墳を直視する状況ではない。

これらから、鼎下山・中平地区に所在する集落とのつながりが強く考えられるが、直接関連するか否かの断定はできない。

次に、副葬品の内容が、本墳被葬者の性格をある程度示している可能性がある。

本墳の副葬品は、該期古墳に一般的にみられる内容と比べるときわめて貧弱である。装身具としての玉類・鏡鑑・武具は皆無である。また、武器も、剣はあるが鐵が無く、弓も副葬されなかつたといえる。

このことは、当地方において、竜丘・松尾・座光寺地区の古墳から多量に武具・武器の出土する状況とはかなり異なった姿といえる。それらの古墳は、当時、大和王権との直接的な関連を論じられるのに対し、墳丘構造とともに在地的な姿を示すともいえる。しかし、副葬された剣は、かなりの良品であり、周溝内出土の須恵器も特筆されるものであることはいうまでもなく、単純に在地勢力云々で片付けられるものでもない。

これらから、当地方に古墳築造が定着する時期に築造された本墳の性格は微妙なものがある。例えば、松尾地区の拠点的な集団から分離し、鼎地区に居を構えた小規模な集団の長を被葬者とした古墳と考えられる。さらに、古墳の立地する位置及び周溝内に殉葬された馬の存在等から、本墳の南方及び西方に広がる八幡原の高燥な段丘面上を活用した馬の飼育、即ち牧の經營が、この時代から行なわれ、それに係わった集団の長の墓として、本墳の姿を導き出すことも可能である。

注1 和田晴吾1989「葬制の変遷」『古墳時代の王と民衆』古代史復元6 講談社

## おわりに

新飯田市立病院の建設は、時代の岐路における大事業として、山間の小さな自治体の運営において測り知れない意味を持つことは、地域住民の誰もが感じているものといえます。一方、山国信州の南端、伊那谷南部の古墳が持つ意味については、近年学界の一部で注目されている他は、その重要性を知る人の数はごく一部にとどまっているのが現状です。こうした中、新らたな開発により、古くより残され続けて来た文化財の1つ、「物見塚古墳」が発掘調査後、消滅したことは、やむをえないことといえます。

しかし、物見塚古墳の発掘と時を同じくして発掘調査された松本市の針塚古墳が、ほぼ同じ頃築造されたものであり、一方が消滅し、一方は保存され後世に伝えられるという事実を直視した時、当物見塚古墳の消え去った姿にひとしおの想いをいだかずにはいられません。

調査開始後、その調査進展とともに、期待と失望が交互に訪づれ、関係者一同少なからず興奮しての調査でした。横穴式石室の不在に疑問を持ち、墳頂部石列に首をひねり、盗掘者の徒労にはくそ笑んだり、悠久の眠りをさますこととなった被葬者にわびながら、手つかずであった内部主体の副葬品の多くを期待したりの現場体験でした。

調査結果の具体的な内容は、本文中に記したとおりで、本古墳が当地方の古墳文化及びその研究活動の中で有する意味の多さを改述する要のないことはいうまでもないわけですが、その重要性を本書の中で十分に示すことのできなかったことを悔みます。また、調査に関し、様々ご指導・ご助言をいただいた多くの方々の期待に応えることのできなかった本書の内容の不備は、調査者の不明としてご寛容いただきたい。

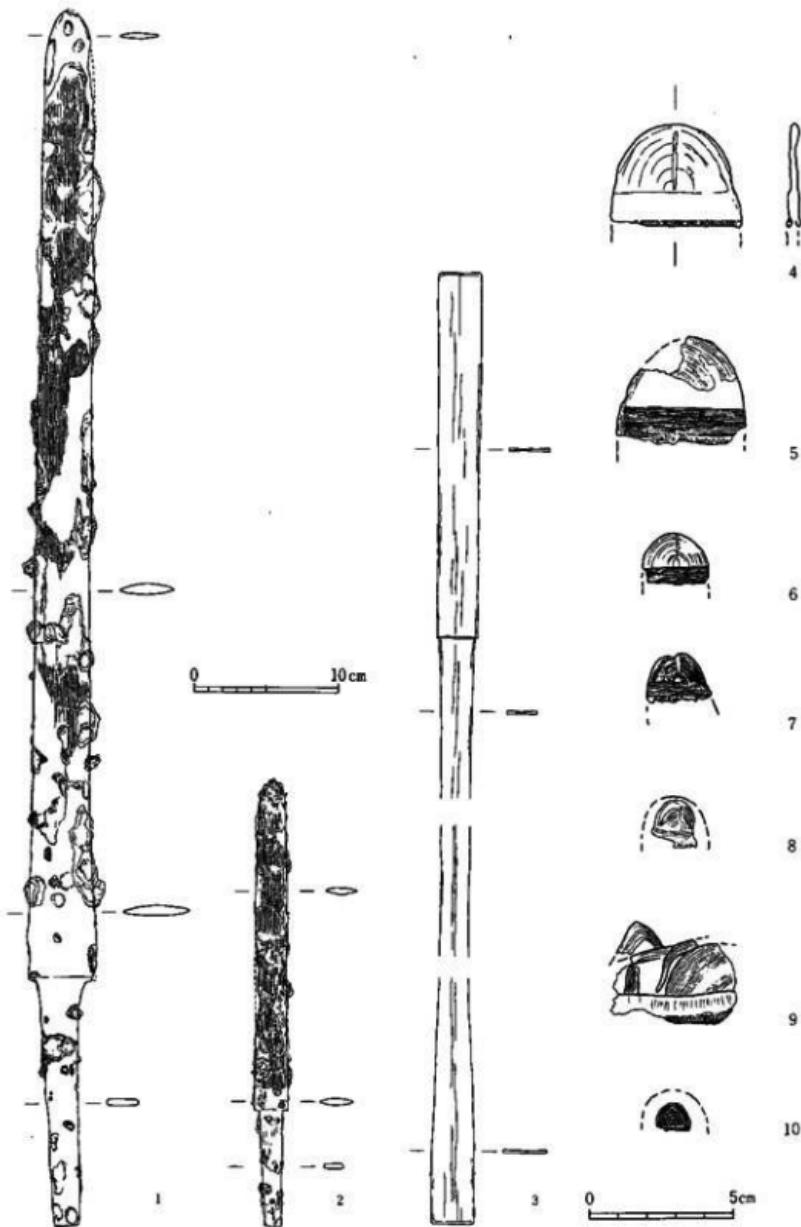
また、物見塚古墳の現地調査を終え、整理作業実施中の平成3年3月8日、大沢和夫先生のご逝去に接した。大沢先生には、当市文化財審議委員会の長として、また、長く長野県の考古学界のリーダーとして、文化財保護のため先頭に立ってご尽力いただきながら、その学恩に報いることのできないことばかりでした。先生の長い考古学研究活動の中で、最後に発掘調査現場に立たれたのが、本物見塚古墳墳頂部に、その埋葬施設が現わになった日であったことは感慨無量です。本書を先生のご靈前に捧げ、学恩への報いの一端とし、冥界からの叱責を甘んじて受ける所存です。

最後に、現地での調査及び本書作成にあたって、ご理解とご協力をいただいた、市立病院をはじめとする関連各機関・各位にまた、文化財保護の本旨をご理解いただき真摯な態度で報道にあたっていただいた報道機関にさらにまた、直接調査に従事していただいた多くの方々の労苦に感謝し、本書のおわりといたします。

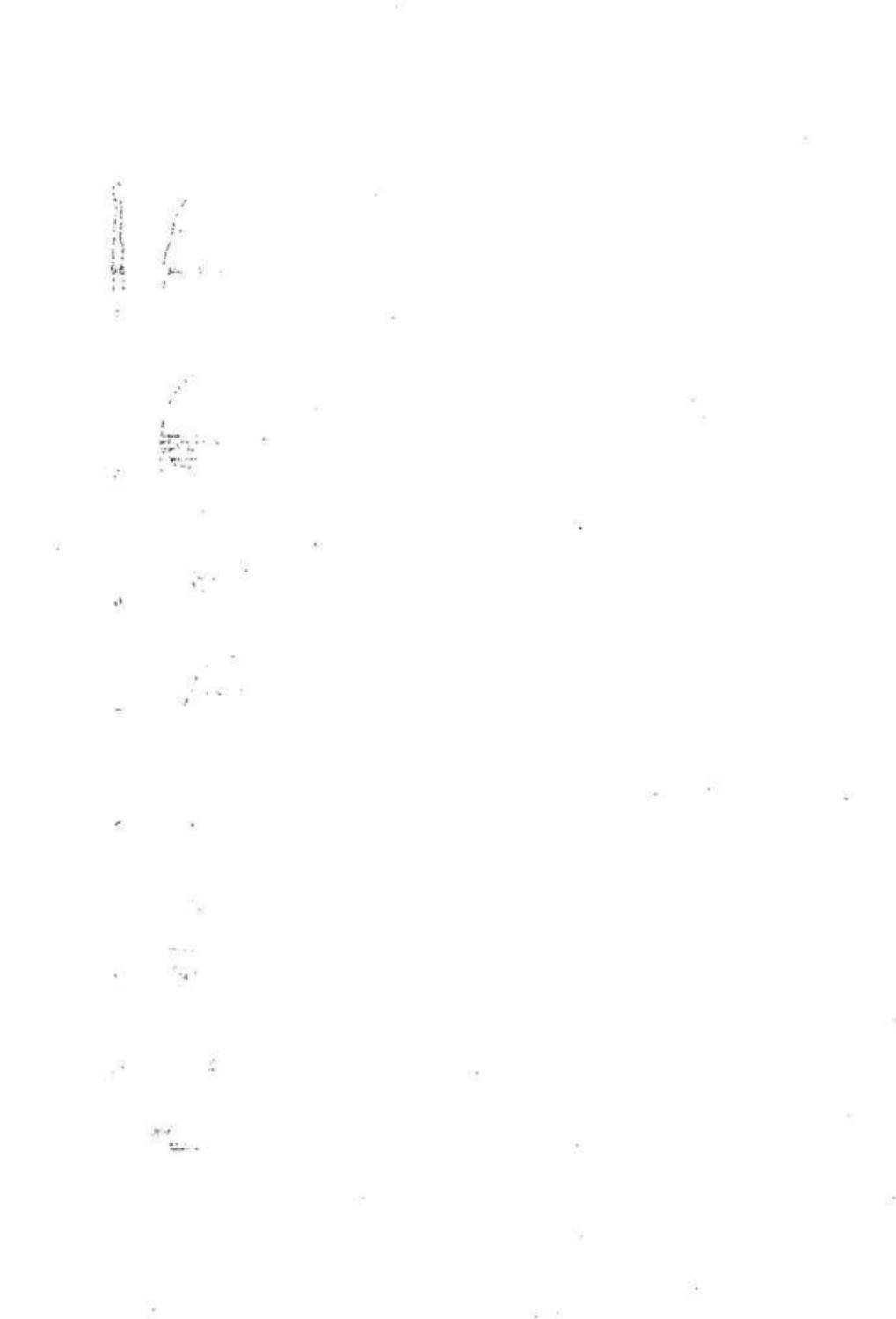
(小林)

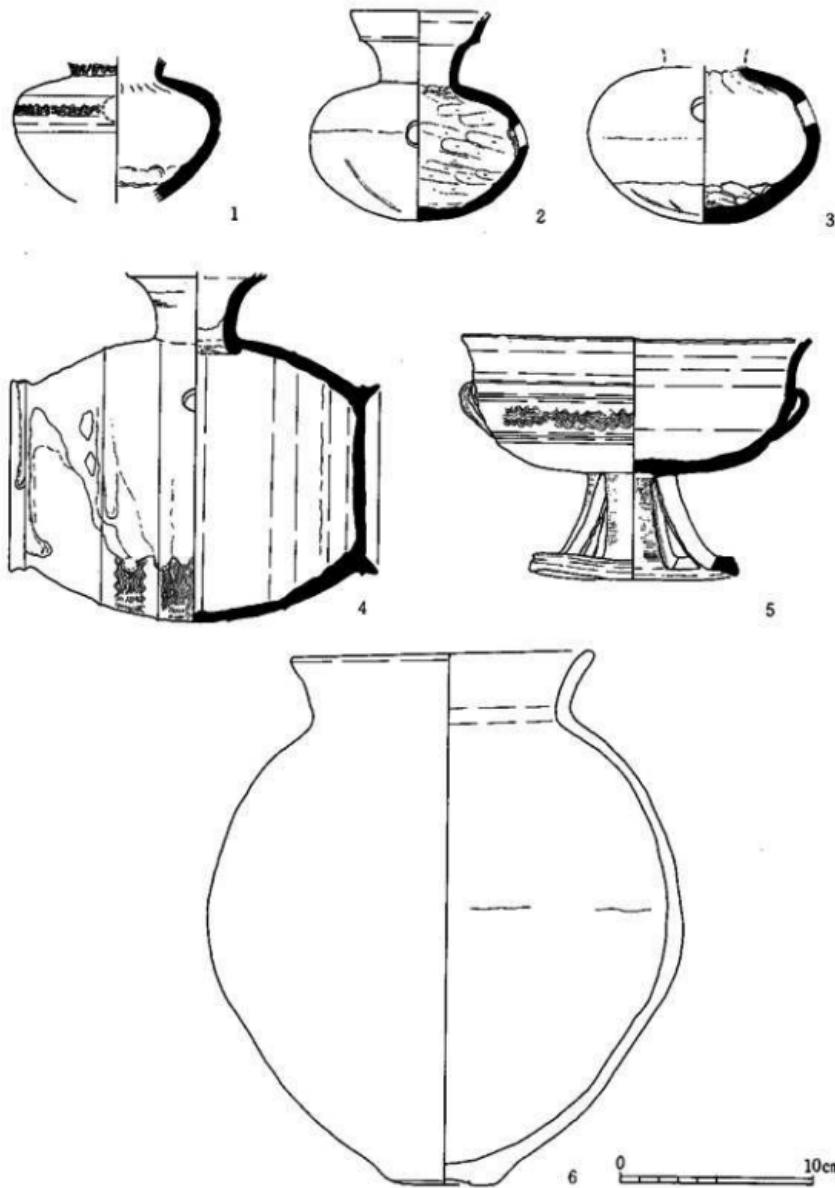
# 図 版



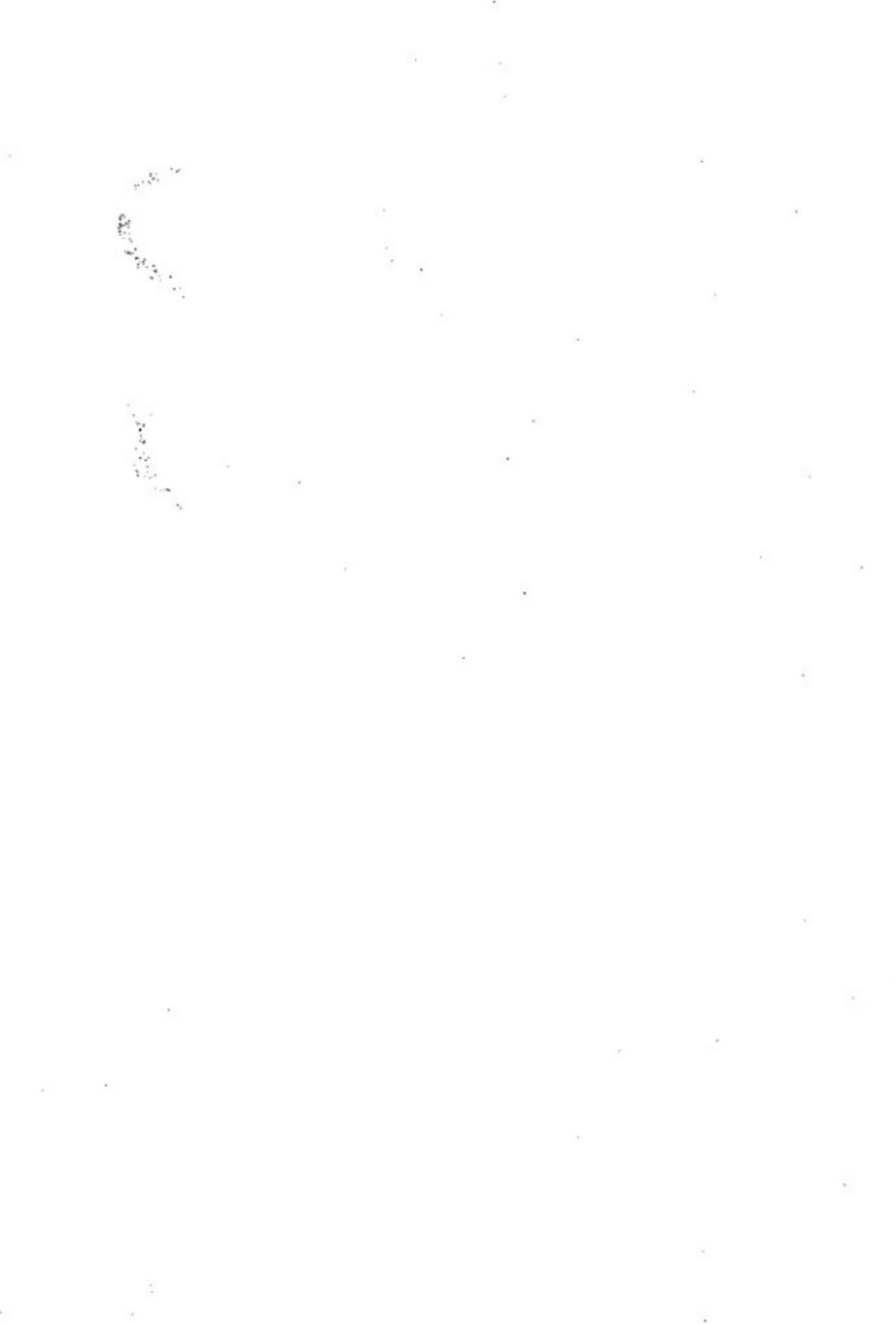


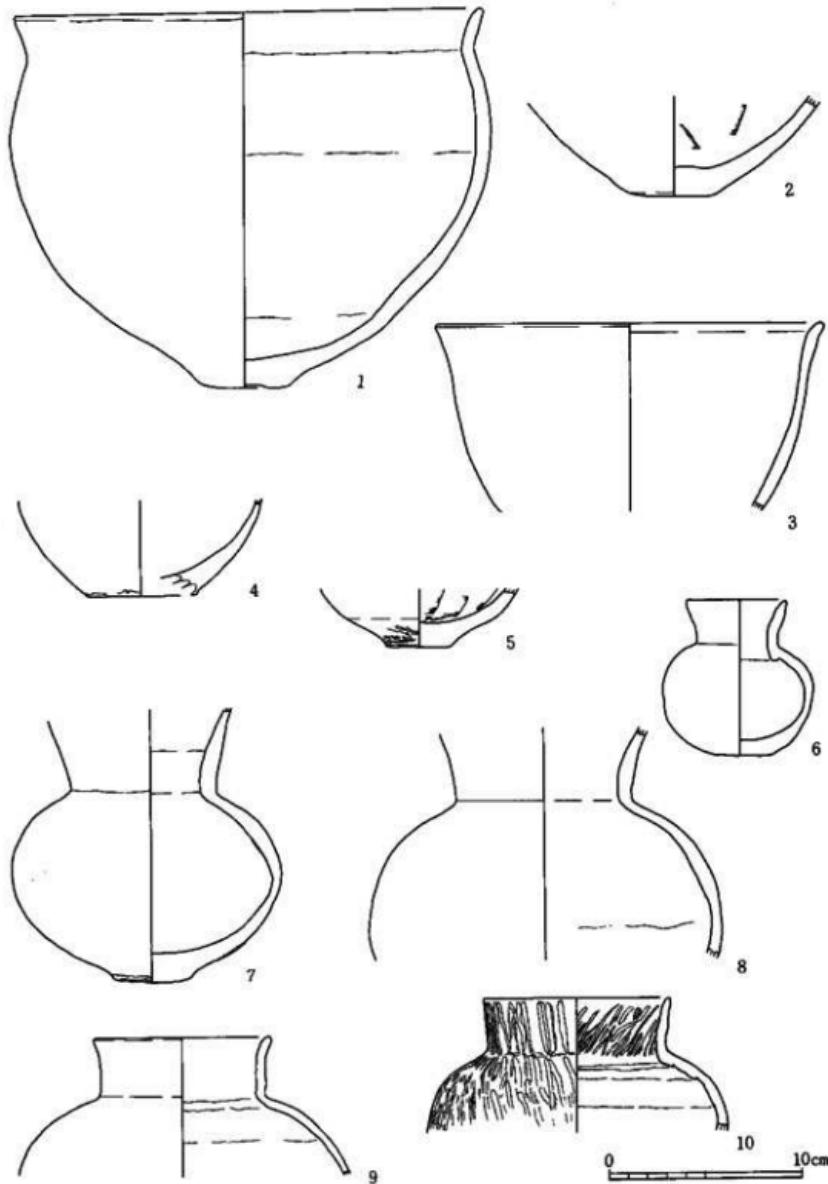
図版第1図 埋葬施設 出土副葬品





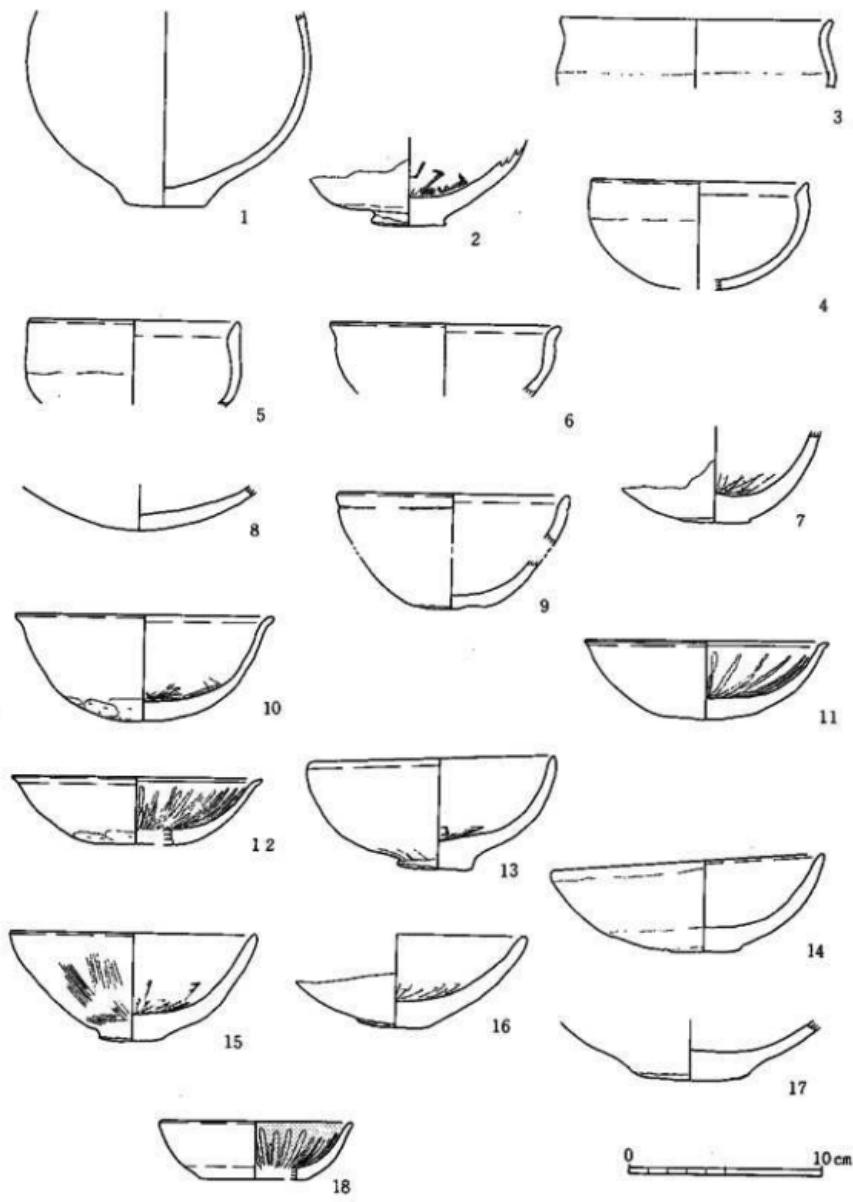
図版第2図 墳頂・周溝出土、須恵器・土師器（墳頂1、周溝2～6）





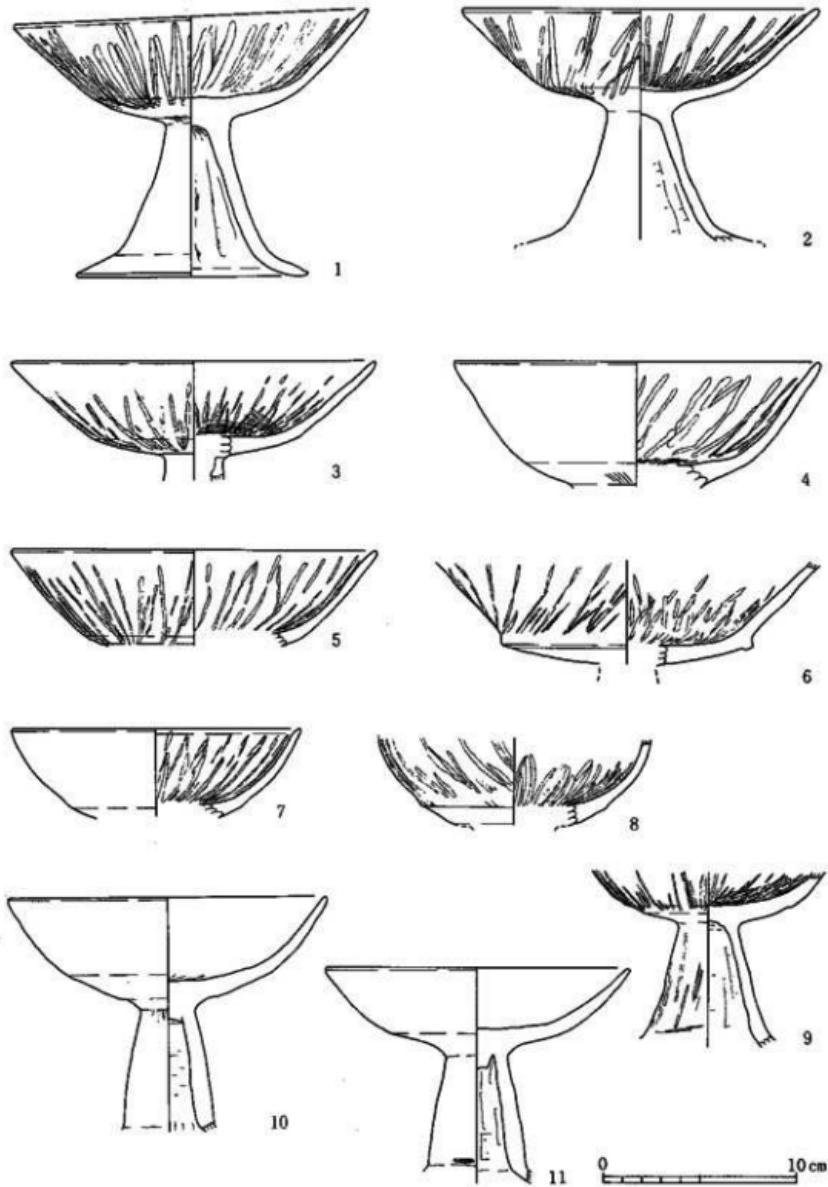
図版第3図 周溝出土土師器





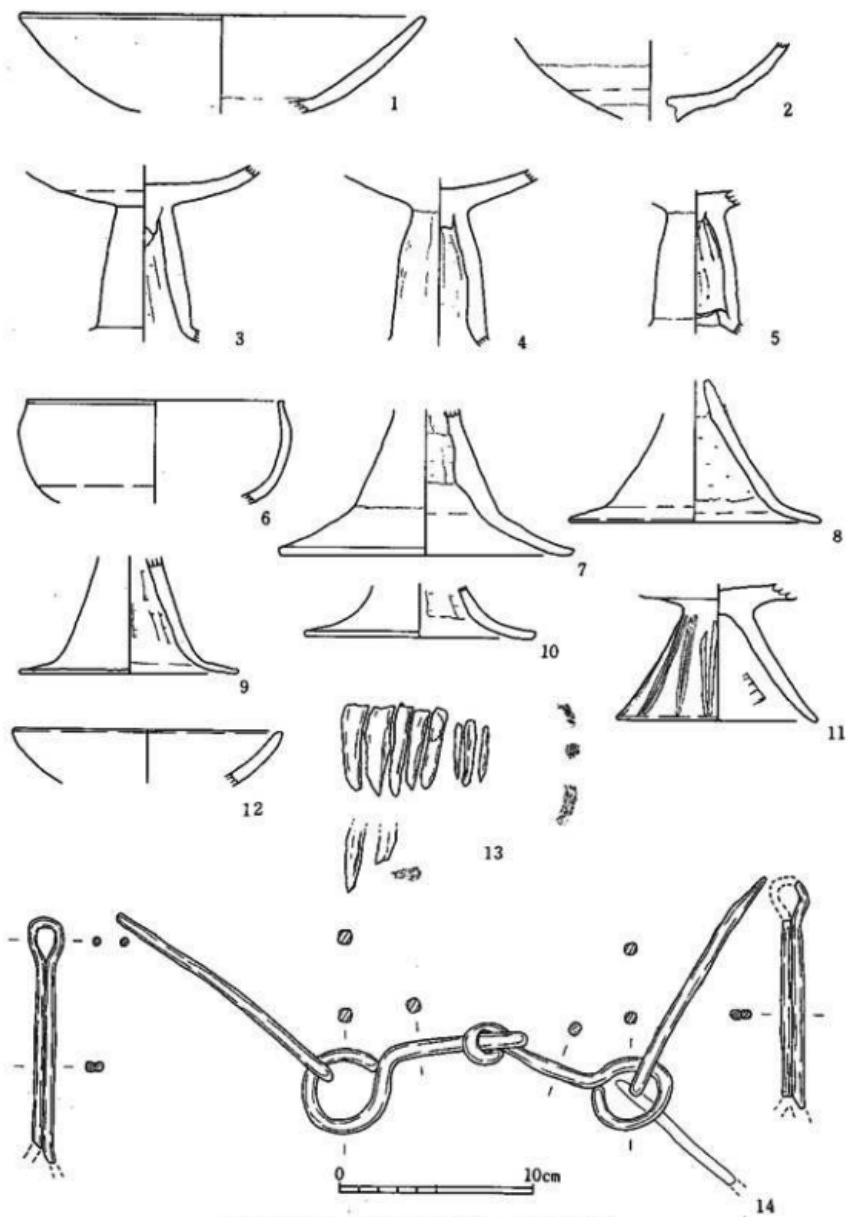
図版第4図 周溝出土土器





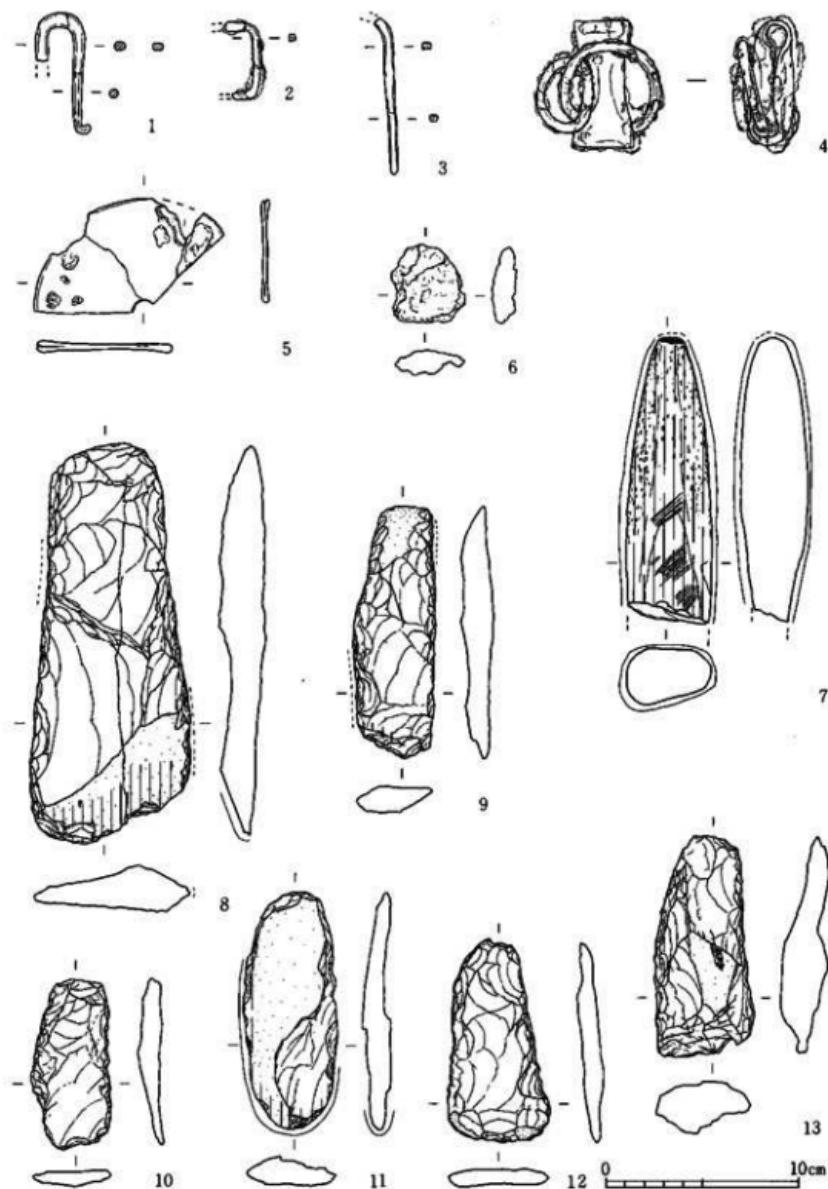
図版第5図 周溝出土土師器





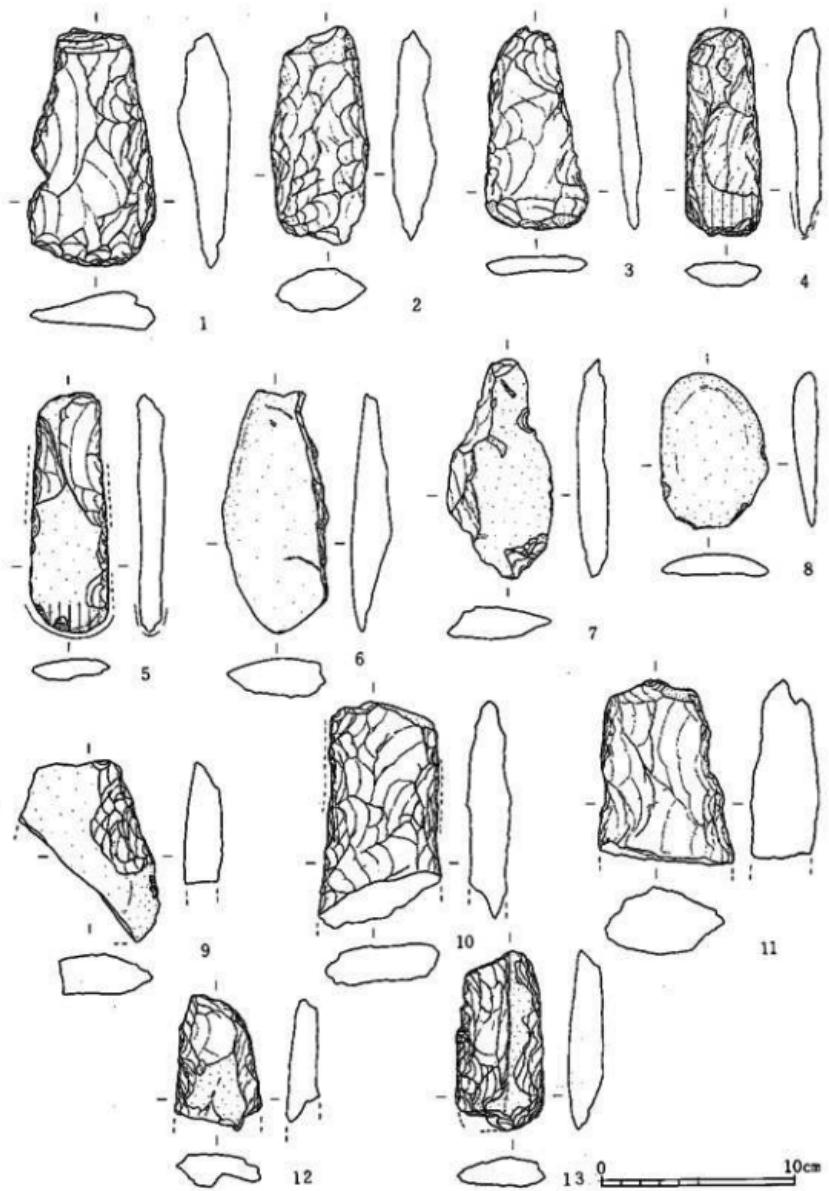
図版第6図 周溝出土土師器・馬の歯・轡





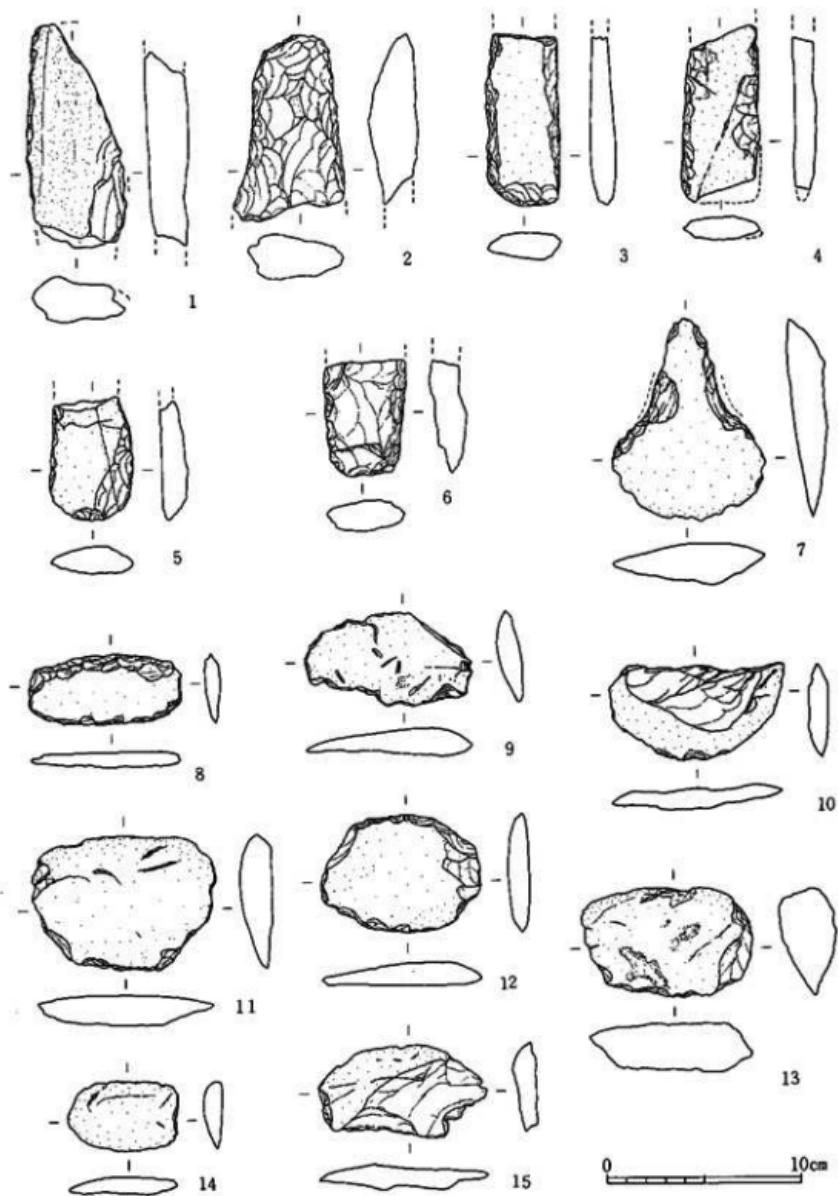
図版第7図 周溝等出土鐵器・鐵滓・混入石器





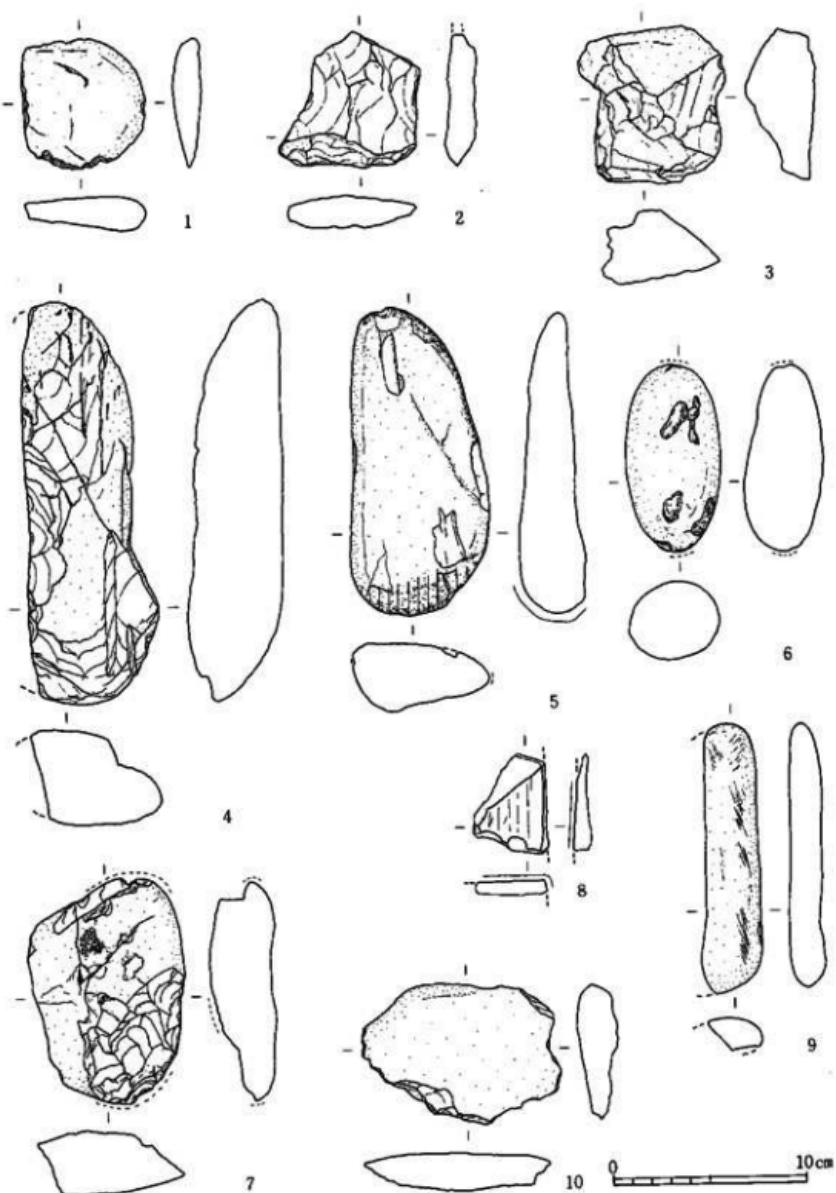
図版第8図 周溝等出土混入石器





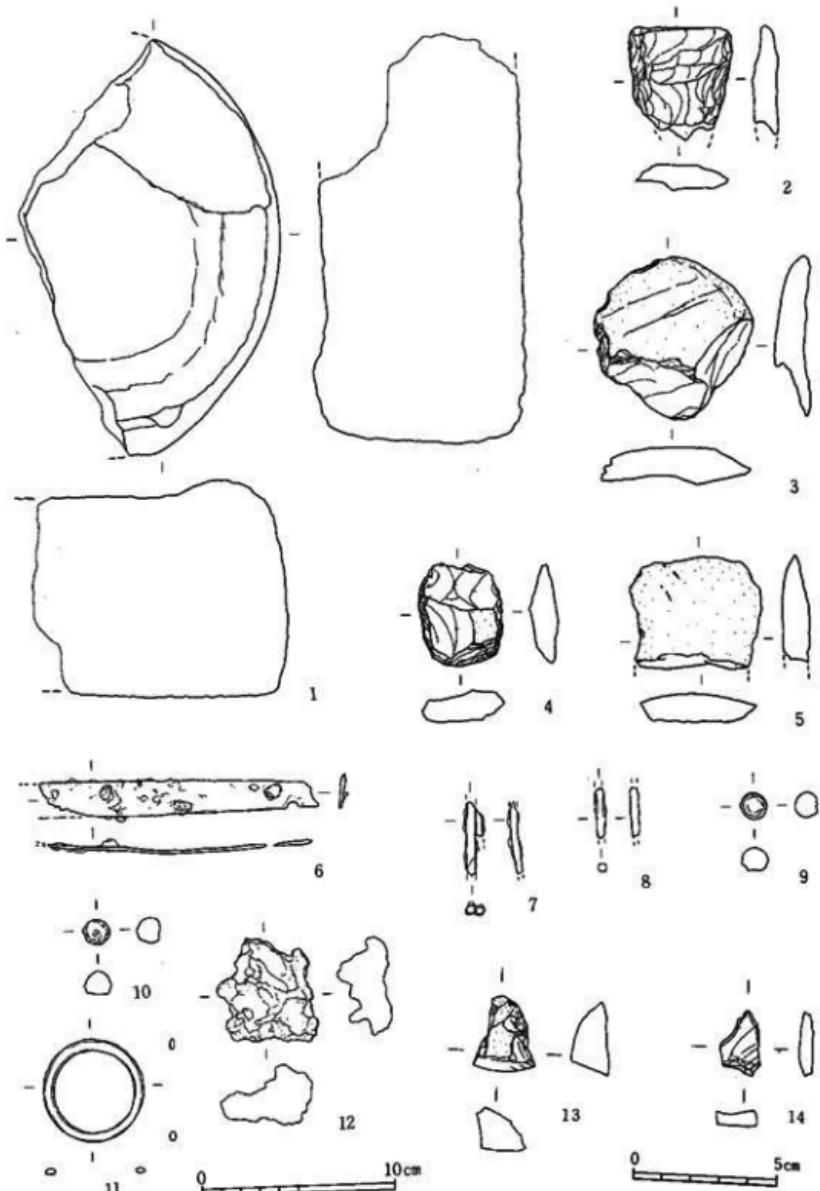
図版第9図 周溝等出土混入石器





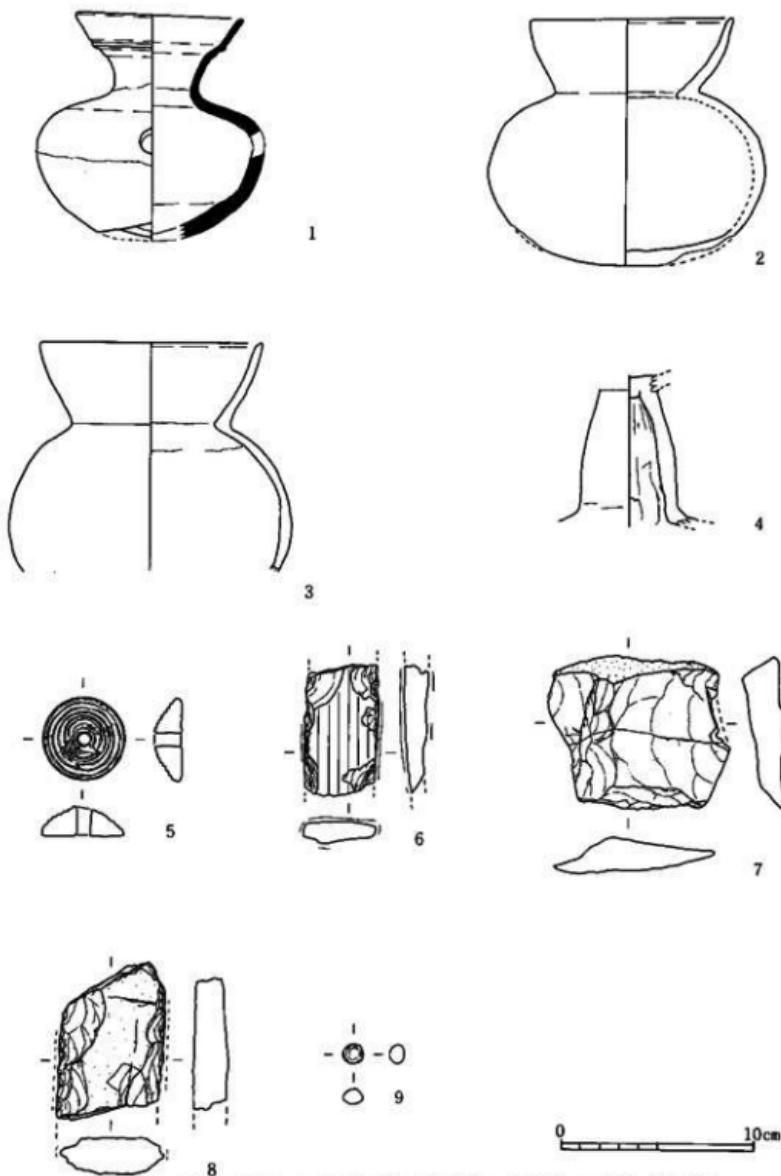
図版第10図 周溝等出土石器・混入石器





図版第11図 周溝等出土混入石器・鉄器





図版第12図 方形周溝墓・西深掘区出土須恵器・土師器・石器・金属器

(方形周溝墓1~7・西深掘区8・9)

# 写真図版



物見塚古墳調査前 南から



物見塚古墳全体 北西から



物見塚古墳全体 南西から



埋葬施設検出 南西から



埋葬施設検出 北西から



埋葬施設土層 南西から

割竹形木棺掘下げる



木棺小口板  
南西部



埋葬施設全体  
北東から

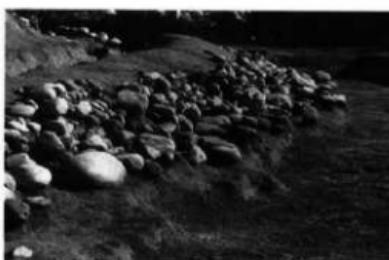


埴頂部石列  
東から

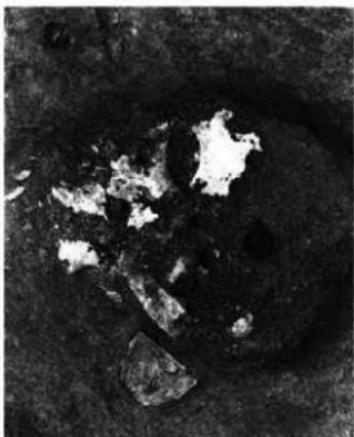
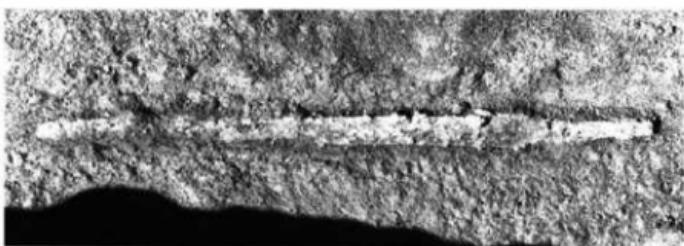




墳頂南側方形落込み



周溝土層・葺石

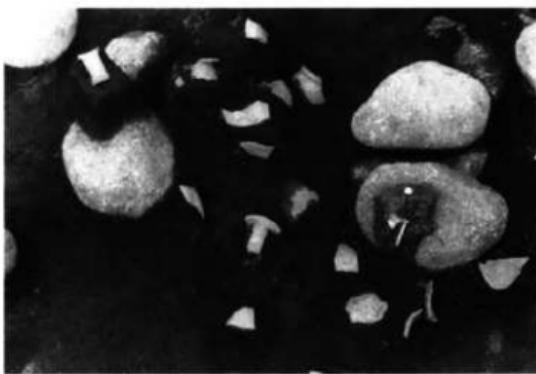


埋葬施設出土副葬品

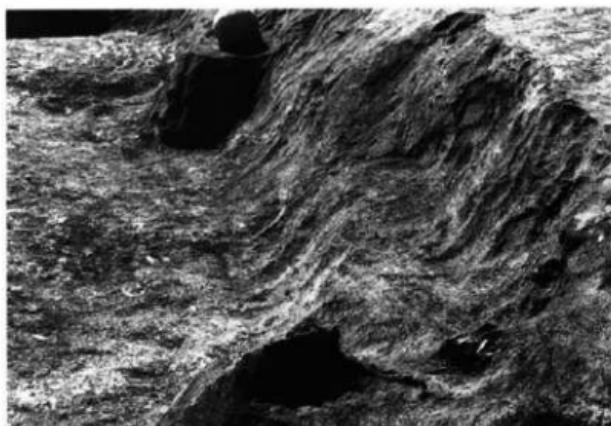
図版 7



埋葬施設出土 堅櫛



周溝出土須恵器 樹形縄高坏



周溝出土  
斐・馬の歯・轡

方形周溝墓全体  
北西から



同上埋葬施設土層



同上周溝土層



方形周溝基  
露出土狀態



同上  
臺



同上  
紡錘車



同上  
西隅出土土器

図版 11



東深掘区



西深掘区



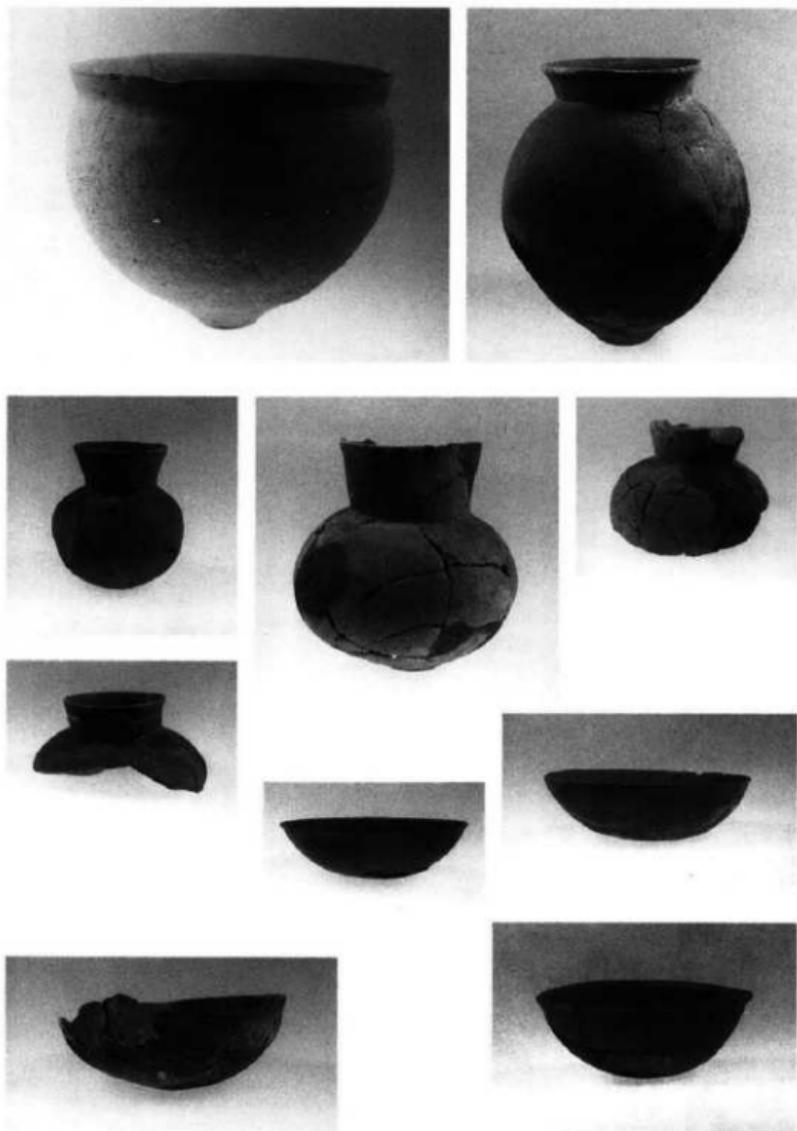


樽形壺



壺

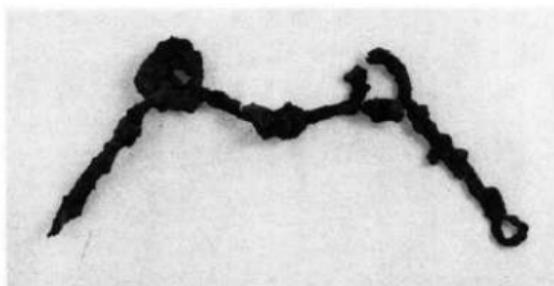
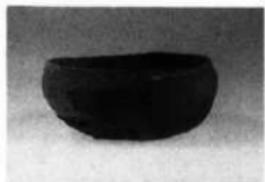
物見塚古墳周溝出土 須恵器



物見塚古墳 周溝出土土師器



高杯

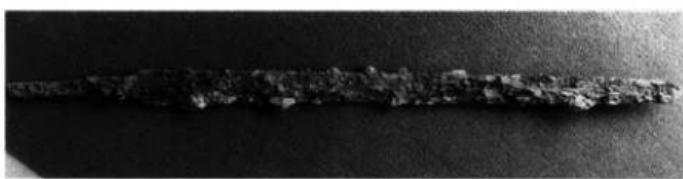


器



馬の歯

図版 15



剣



短 剣

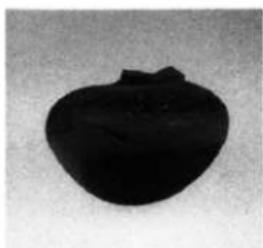


漆被膜の一部



頭蓋骨・歯

物見塚古墳 埋葬施設出土



須  
惠  
器  
底



鐵  
製  
茎  
片

物見塚古墳 墳頂石列出土



須  
惠  
器  
罐



土  
師  
器  
壺



土  
師  
器  
壺



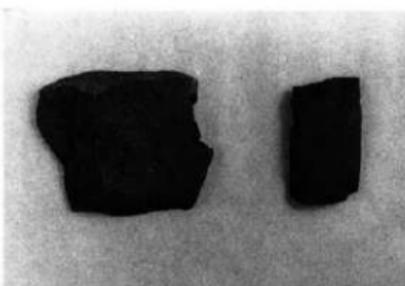
高  
杯

周溝墓周溝出土

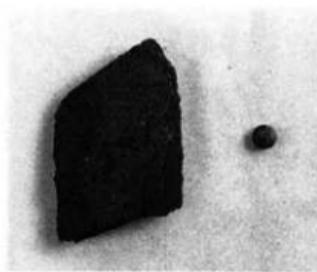
石製紡錘車



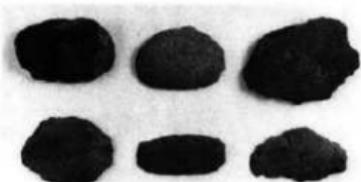
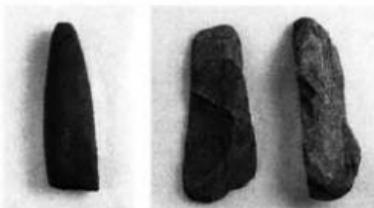
石  
器



周溝墓 周溝出土



西深掘区出土



物見塚古墳出土 石器



物見塚古墳 埋葬施設調査スナップ



物見塚古墳 調査スナップ

物見塚古墳  
表土剥ぎ



周溝墓  
調査



深掘西区



深掘東区



調査スナップ



見  
学  
会

長姫高校 日本史学習

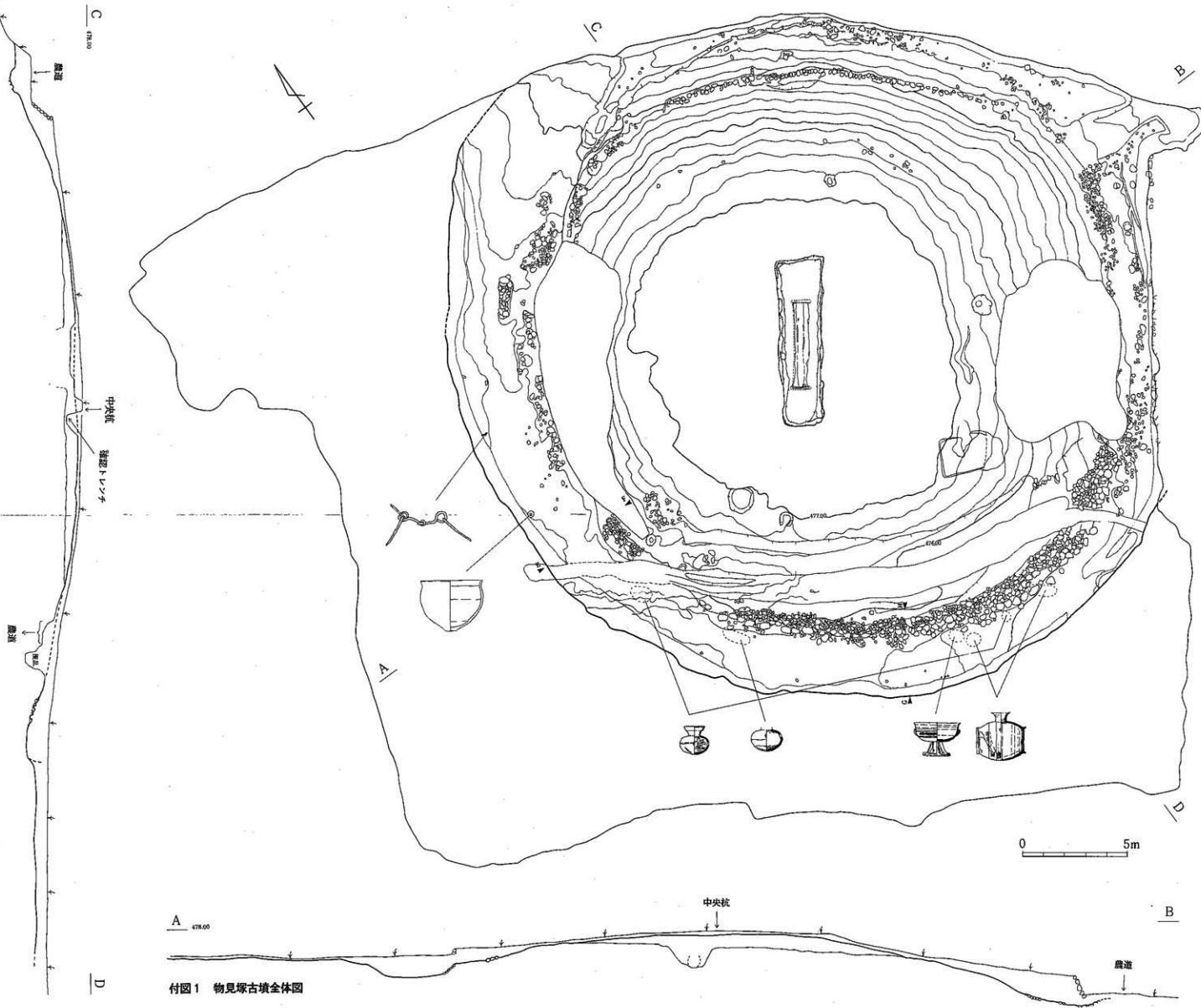


教育長 次長

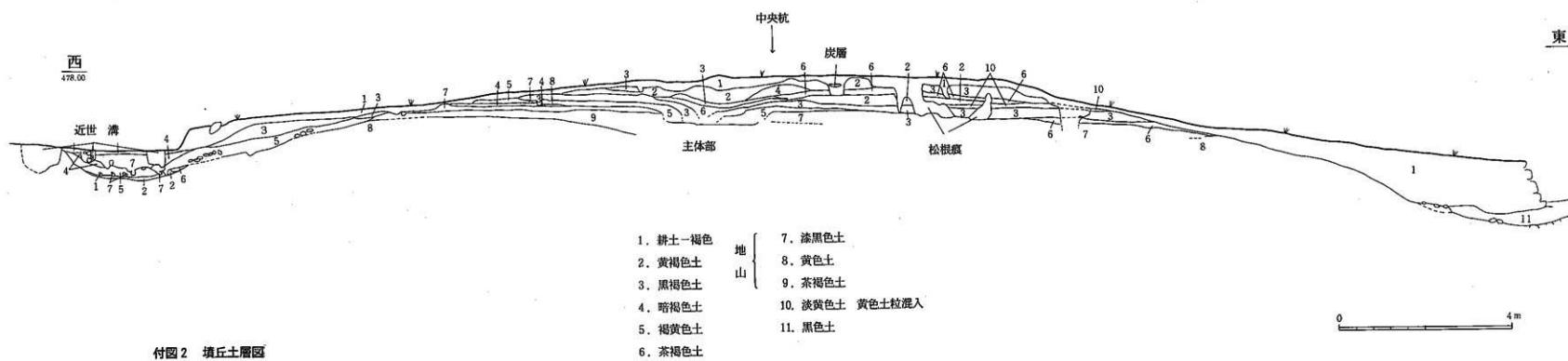
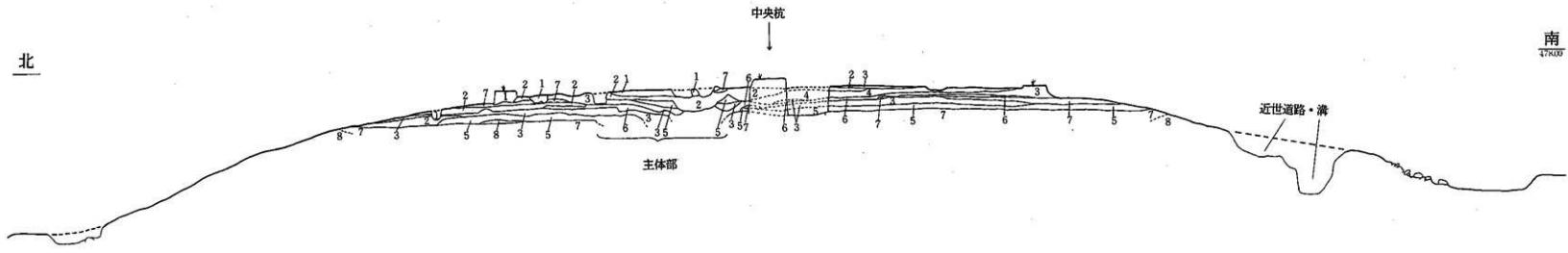
故  
大沢和夫  
前長野県考古学会会長



見学スナップ



付図1 物見塚古墳全体図



付図2 填丘土層図

---

# 八幡原遺跡 物見塚古墳

飯田市立病院新築移転に伴う緊急発掘調査報告書

印 刷 1992年3月20日

発 行 1992年3月31日

長野県飯田市大久保町2534番地

編集発行 飯田市教育委員会

印 刷 龍共印刷株式会社

---

